

527
25

事故本
欠ページ
P. 113 ~ 最終頁
1991.4.10

×
複写



始



工 249

書叢秋春藝文

— 2 —

輪 日

著 一 利 光 橫



版 堂 陽 春



文藝春秋叢書

第二編

月輪

橫光利一著

527
25



春陽堂版



大正

13.6.13

中六

127-25

目次

日	輪	一
碑	文	二三
敵		三五
蠅		四

2



序 章

乙女達の一團は水甕を頭に載せて、小丘の中腹にある泉の傍から、唄ひながら合歡木の林の中に隠れて行つた。後の泉を包んだ岩の上には、まだ凋れぬ太蘭の花が、水甕の破片ごころにも踏みにぢられて残つてゐた。さうして西に傾きかゝつた太陽は、この小丘の裾遠く擴つた有明の入江の上に、長く曲折しつゝ、迥か水平線の兩端に消え入る白い砂丘の上に今は力なくその光を投げてゐた。乙女達の合唱は華やかな酒樂の歌に變つて來た。さうして、林をぬけるご再び、人家を包む圓やかな濃綠色の團塊となつた森の中に吸はれて行つた。眼界の風物、何一つごして動くものは見えなかつた。

そのごき、今迄、泉の上の小丘を蔽つて靜まつてゐた萱の穂波の一點が二つに割れてざわめいた。するご、割れ目は數羽の雉子ご隼ごを飛び立たせつゝ、次第に泉の方へ眞直ぐに延びて來た。さうして、間もなく、泉の水面に映つてゐる白茅の一行が裂かれたごき、そこ

には弦の切れた短弓を握つた一人の若者が立つてゐた。彼の大きく窪んだ眼窩や、その突起した顫や、その影のやうに暗鬱な顔の色には、道に迷ふた者の極度の疲勞ご饑餓の苦痛が現れてゐた。彼は這ひながら岩の上に降りて來るご、弓杖ついて崩れた角髪をかき上げながら、渦卷く蔓の刺青を描いた唇を泉につけた。彼の首から垂れ下つた一連の白瑪瑙の勾玉は、音も立てず水に浸つて、靜かに藻を食ふ魚のやうに光つてゐた。

一

太陽は入江の水平線へ朱の一點ごなつて没していつた。不彌の宮の高殿では、垂木の木舞に吊り下げられた鳥籠の中で、樗鳥が習ひ覺えた卑彌呼の名を一聲呼んで眠りに落ちた。磯からは、満潮のさごめき寄せる波の音が刻々に高まりながら、濱藻の匂ひを籠めた微風に送られて響いて來た。卑彌呼は薄桃色の染衣に身を包んで、聽て彼女の良人ごなるべき卑狗の大兄ご向ひ合ひながら、鹿の毛皮の上で管玉ご勾玉ごを撰り分けてゐた。卑狗大兄は、砂濱に輝き始めた漁夫の松明の明りを振り向いて眺めてゐた。

「見よ、大兄、爾の勾玉は玄猪の爪のやうに穢れてゐる。」ご、卑彌呼は云つて、大兄の勾玉を彼の方へ差し示した。

「やめよ、爾の管玉は病める盃のやうに曇つてゐる。」

卑彌呼のめでたきまでに玲瓏とした顔は、暫く大兄を睥んで黙つてゐた。

「大兄、以後我は玉の代りに真砂を爾に見せるであらう。」

「爾の玉は爾の小指のやうに穢れてゐる。」と、大兄は云ふと、その皮肉な微笑を浮べた顔を、再び砂濱の松明の方へ振り向けた。「見よ、松明は輝き出した。」

「此處を去れ。此處は爾のごき男の入る可き處ではない。」

「我は歸るであらう。我は爾の管玉を奪へば爾を置いて歸るであらう。」

「我の玉は、爾に穢された吾身のやうに穢れてゐる。行け。」

「待て、爾の玉は爾の靈よりも光つてゐる。玉を與へよ。爾は玉を與へるに我に云つた。行け。」

卑狗の大兄は笑ひながら、自分の勾玉をさら／＼と小壺に入れて立ち上つた。

「今宵は何處で逢はう？」

「行け。」

「丸屋で待たう。」

「行け。」

大兄は遺戸の外へ出て行つた。卑彌呼は残つた管玉を引きたれた裳裾の端で掃き散らしながら、彼の方へ走り寄つた。

「大兄、我は高倉の傍で爾を待たう。」

「我はひこり月を待たう。今宵の月は満月である。」

「待て、大兄、我は爾に玉を與へよう。」

「爾の玉は、我に穢された爾のやうに穢れてゐる。」

大兄の哄笑は忍竹を連ねた瑞籬の横で起るに、夕闇の微風に揺れてゐる柏の根の傍まで續いていつた。卑彌呼は染衣の袖を噛みながら、遠く松の茂みの中へ消えて行く大兄の姿を見詰めてゐた。

二

夜は暗かつた、卑彌呼は鹿の毛皮に身を包んで宮殿からぬけ出るに、高倉の藁戸に添つて大兄を待つた。栗鼠は頭の上で、栗の梢の枝を撓めて音を立てた。

「大兄。」

野兎は蔞麻の茂みの中で、晝に狙はれた青鷹の夢を見た。さうして、飛び跳ねるに蔞麻

の幹に突きあたりながら、零餘子のは叢の中に馳け込んだ。

「大兄。」

梟は木櫛樹の梢を降りて來た。そして、嫁菜を踏みながら群る薙苳の下を潜つて青蛙に飛びついた。

「大兄。」

併し、卑狗の大兄はまだ來なかつた。卑彌呼は藁戸の下へ蹲踞るこ、ひまり菘を引いては投げ引いては投げた。月は高倉の千木を浮かべて現れた。森の柏の静まつた葉波は一齊に濡れた銀の鱗のやうに輝き出した。そのこき、軽い口笛が草玉の茂みの上から聞えて來た。卑彌呼は藁戸から身を起すこ、草玉の穂波の上に半身を浮かべて立つてゐる卑狗の大兄の方へ歩いていつた。

「大兄、大兄。」 彼女は鹿の毛皮を後ろに跳ねて彼の方へ近か寄つた。「夜は間もなく明けらるであらう。」

併し、大兄は輝く月から眼を放さずに立つてゐた。

「大兄よ、我は管玉を持つて來た。爾は受けよ。」 卑彌呼は云つて管玉を大兄の前に差し出した。

「爾は何故にこゝへ來た？ 我はひまり月を眺めにこゝへ來た。」

「我は爾に玉を與へにこゝへ來た。受けよ、我は玉を與へるこ爾に云つた。」

大兄は卑彌呼の管玉を攫んでこつた。

「我は爾に逢はんがためにこゝへ來た。爾は我に玉を與へにこゝへ來た。爾は歸れ。」 大兄は云つて再び空の月へ眼を向けた。

卑彌呼は黙つて草玉の實をしごき取るこ大兄の横顔へ投げつけた。大兄は笑ひながら急に卑彌呼の方へ振り向いた。さうして、彼女の肩へ兩手をかけて抱き寄せようとするこ、彼女は大兄の胸を突いて身を放した。

「我は歸るであらう。我は爾に玉を與へた。我は歸るであらう。」

「よし、爾は歸れ、爾は歸れ。」 大兄は云ひながら、彼女の振り放さうとする兩手を持つた。さうして、彼女を引き寄せた。

「放せ、放せ。」

「歸れ、歸れ。」

大兄は澡搔く卑彌呼を横に軽々抱き上げるこ、こつこ草玉の中へ身を落した。さらさらこ揺めいた草玉は、その實を擦つて二人の上で鳴つてゐた。

「卑彌呼、見よ、爾は彼方の月のやうに美しい。」

彼女は大兄の腕の中に抱かれたまゝ、今は靜に眼を瞑ぢて彼の胸の上へ頬をつけた。

「卑彌呼、もし爾が我の子を産めば姫を産め。我は爾のごきき姫を欲する。もし爾が彦を産めば、我のごきき彦を産め。我は爾を愛してゐる。爾は我を愛するか。」

しかし、卑彌呼は大兄を見上げて黙つたまゝ、片手で彼の頬を撫でてゐた。

「あゝ、爾は月のやうに黙つてゐる。冷たき月は缺けるであらう。爾は歸れ。」

大兄は卑彌呼を揺つて睥まへた。が彼女は微笑し乍ら靜に大兄の顔を見上げて黙つてゐた。「歸れ、歸れ。」

大兄は云ひつゝ、彼女を抱いた兩腕に力を籠めた。卑彌呼は大兄の首へ手を卷いた。さうして、二人は黙つてゐた。月は青い光りを二人の上に投げながら、彼方の森からだんく高く昇つていつた。そのごきき、一人の瘦せた若者が、生薑を噛みつゝ、木槌樹の下へ現れた。彼は破れた軽い麻鞋を、水に浸つた俵のやうに重々しく運びながら、次第に草玉の茂みの方へ近か寄つて來た。卑彌呼の大兄は足音を聞くに立ち上つた。

「爾は誰か？」

若者は立停るに、生薑を投げ捨てた手で劍の頭椎を握つて黙つてゐた。

「爾は誰か。」と再び大兄は云つた。

「我は路に迷へる者。」

「爾は何處の者か。」

「我は旅の者、我に糧を與へよ。我は爾に劍と勾玉を與へるであらう。」

大兄は卑彌呼の方へ振り向いて彼女に云つた。

「爾の早き夜は不吉である。」

「大兄、旅の者に食を與へよ。」

「爾は彼を伴なうて食を與へよ。」

「良きか、旅の者は病者のやうに瘦せてゐる。」

大兄は黙つて若者の顔を眺めた。

「大兄、爾はこゝにゐて我を待て、我は彼を贅殿へ伴なはう。」卑彌呼は毛皮を被つて若者の方を振り向いた。「我に従つて爾は來れ。我は爾に食を與へよう。」

「卑彌呼、我は最早や月を見た。我はひこりて歸るであらう。」大兄は彼女を睥んで云つた。

「待て、大兄、我は直ちに歸るであらう。」

「行け。」

「大兄よ。爾は我に代つて彼を伴なへ、我は此處で爾を待たう。」

「行け、行け、我は爾を待つてゐる。」

「良きか。」

「良し。」

「來れ。」と卑彌呼は若者に再び云つた。

若者は、月の光りに咲き出た夜の花のやうな卑彌呼の姿を、茫然として眺めてゐた。彼女は大兄に微笑を與へるに、先に立つて宮殿の身屋の方へ歩いていつた。若者は漸く麻鞋を動かした。さうして、彼女の影を踏みながらその後から従つた。大兄の顔は顰んで來た。彼は小石を拾ふと森の中へ投げ込んだ。森は數枚の柏の葉から月光を拂ひ落して眩いた。

三

身屋の贅殿の二つの隅には松明が燃えてゐた。一人の膳夫は松明の焰の上で、鹿の骨を焙りながら明日の運命を占つてゐた。彼の恐怖を浮べた赧い横顔は、立ち昇る煙を見詰めながらだん／＼と悦びの色に破れて來た。そのとき、入口の戸が押し開けられて、後に一人の若者を従へた王女卑彌呼が這入つて來た。膳夫は振り向くに、火のついた鹿の骨を握つ

たま、眞菰の上に跪拜いた。卑彌呼は後の若者を指差して膳夫に云つた。

「彼は路に迷へる旅の者。彼に爾は食を與へよ。彼のために爾は臥所ふしどを作れ。」

「酒は？」

「與へよ。」

「粟は？」

「與へよ。」

彼女は若者の方を振り向いて彼に云つた。

「我は爾を残して行くであらう。爾は爾の欲する物を彼に命じよ。」

卑彌呼は臂に飾つた釧くしの碧玉を松明に輝かせながら、再び戸の外へ出て行つた。若者は眞菰の上突き立つたま、その落ち窪んだ眼を光らせて卑彌呼の去つた戸の外を見つめてゐた。

「旅の者よ。」と、膳夫の聲が横でした。

若者は膳夫の顔へ眼を向けた。さうして、彼の指差してゐる下を見た。そこには、海水を湛へた盥あらいの中に海螺と山蛤が浸してあつた。

「かの女は何者か。」

「此の宮の姫、卑彌呼ミ云ふ。」

膳夫は彼の傍から隣室の方へ下がつていつた。廳で、數種の行器はかるが若者の前に運ばれた。その中には、野老ミ蘿蔔ミ朱實ミ粟ミがはいつてゐた。櫛たしの木の心から製した醜もろの酒は、その傍の酒瓮みわの中で、薰はしい香氣を立て、まだ波々ミ揺いでゐた。若者は片手で粟を搗むむこ、「卑彌呼。」ミ一言呟いた。

そのとき、君長の面前から下つて來た一人の宿禰が、八尋殿を通つて贄殿の方へ來た。彼は痼疾の中風症に震へる老軀を數人の使部に護られて、若者の傍まで來るミ立停つた。「爾は何處の者か。」

宿禰の垂れ下つた白い眉毛は、若者を見詰めてゐる眼の上で慄へてゐた。「我は路に迷へる旅の者。」

「爾の額の刺青は珠である。爾は奴國の者であらう。」
「否。」

「爾の顎の刺青は月である。爾は奴國の貴族であらう。」
「否。」

「爾の唇の刺青は蔓である。爾は奴國の王子であらう。」

「否、我は路に迷へる旅の者。」

「やめよ。爾の祖父は不彌の王母を掠奪した。爾の父は不彌の靈床に火を放つた。彼を殺せ」宿禰の茨の根で作つた杖は若者の方へ差し向けられた。忽ち、使部達の劍は輝いた。若者は突つ立ち上るこ、搦んだ粟を眞先に肉迫する使部の面部へ投げつけた。劍を抜いた。こ見る間に、使部の片手は劍を握つたま、胸を放れて酒の中へ落ち込んだ。使部達は立ち停つた。若者は飛び退くこ、杉戸を脊にして突き立つた。彼を目がけて盃が飛んだ。行器が飛んだ。覆つた酒瓮から酒が流れた。さうして、海螺や朱實が立ち籠めた酒氣の中を杉戸に當つて散亂するこ、再び數本の劍は一齊に若者の胸を狙つて進んで來た。身屋の外では法螺が鳴つた。若者は劍を舞はせて使部達の劍の中へ馳け込んだ。さうして、その背後で痼疾に震へてゐる宿禰の上へ飛びか、るこ、彼を眞孤の上へ押しつけた。使部達の劍は再び彼に襲つて來た。彼は宿禰の胸へその劍の尖をさし向けるこ彼らに云つた。

「我を殺せ、我の劍も動くであらう。」

使部達は若者を包んだま、動くここが出来なかつた。宿禰は若者の膝の下で、なほその老軀を震はせながら彼らに云つた。

「我を捨てよ。彼を刺せ。不彌のために奴國の王子を刺し殺せ。」

併し、使部達の劍は振り上つたまゝに下らなかつた。法螺はたゞ一つますく高く月の下を鳴り續けた。銅鑼が鳴つた。兵士達の銅鉾を叩いて馳せ寄る響が、武器庫の方へ押し寄せ、更に贄殿へ向つて雪崩れて來た。

「奴國の者が宮に這入つた。」

「姫を奪ひに。」

「鏡を掠りに。」

騒ぎは人々の口から耳へ、耳から口へ静まつた身屋を包んで波紋のやうに擴つた。やがて、贄殿の内外は、兵士達の鉾尖のために明るくなつた。

「奴國の者は何處へ行つた。」

「奴國の者を外へ出せ。」

贄殿の入口は動亂する兵士達の肩口で押し破られた。そのとき、彼らの間を分けて、一人卑彌呼が進んで來た。兵士達は争つて彼女の前に道を開いた。彼女は贄殿の中へ這入るこゝ、使部達の劍に包まれた若者の姿を眼にこめた。

「待て、彼は道に迷ひし旅の者。」

「彼は奴國の王子である。」

「彼は我の伴なひし者。」

「彼の祖父は不彌の王母を掠奪した。」

「劍を下げよ。」

「彼の父は不彌の神庫に火を放つた。」

卑彌呼は使部達の劍の下を通つて若者の傍に出た。

「我は爾に食を與へた。爾は爾の國へ直ちに歸れ。」

若者は踏み敷いた宿禰を捨て、劍を投げた。さうして、卑彌呼の前に跪拜くこ、彼は崩れた角髪の下から眼を光らせて彼女に云つた。

「姫よ、我を爾の傍におけ、我は爾の下僕にならう。」

「爾は歸れ。」

「姫よ、我は爾に我の骨を捧げよう。」

「去れ。」

「姫よ。」

「彼を出せ。」

使部達は劍を下げて若者の腕を握つた。さうして、彼を戸外の月の光りの下へ引き出す

さ、若者は彼ら突き伏せて再び贅殿の中へ馳け込んだ。

「姫よ。」

「去れ。」

「去れ。」

「去れ。」

「爾は私の命を奪ふであらう。」

忽ち、兵士達の鋒尖は、匂玉の垂れた若者の胸へ向つて押し寄せた。若者は鋒尖の映つた銀色の眼で卑彌呼を見詰めながら、再び戸外へ退けられた。さうして、彼は數人の兵士に守られつゝ、月の光りに静まつた萩の紫苑の花壇を通り、紫竹の茂つた玉垣の間を白洲へぬけて、磯まで来る。兵士達の嘲笑もこもに鞭ツミ濱藻の上へ投げ出された。一連の波が襲つて來た。さうして、彼の頭の上を乗り越えて消えて行く。彼は漸く半身を起して宮殿の方を見續けた。

四

「王子は歸つた。」

「呪禁師の言はあつた。」

「峠を越えて。」

「矛木のやうに瘦せて歸つた。」

奴國の宮は、山の麓の篠屋の中から騒ぎ始めた。さうして、この騒ぎは宮を横切つて、宮殿の中へ這入つて行く。夜になつて、神庫の前の庭園で盛大な饗宴になつて變つて來た。

松明を咬んだ火串は圓形にその草野を包んで立てられた。集つた宮人達には、鹿の肉片さ、松葉で造つた麴酒や醗の酒が配られ、太夫や使部には、和稻から作つた諸白酒が與へられた。さうして、宮の婦人達は彼らの前で、まだ花咲かぬ忍冬を頭に卷いた鈿女になつて、酒樂の唄を謠ひながら踊り始めた。數人の若者からなる樂人は、槽や土器を叩きつゝ、二絃の琴に調子を打つた。

肥え太つた奴國の宮の君長は、童男三人の宿禰を従へて櫓の上で、瘦せ細つた王子の長羅を並んでゐた。長羅は過ぎた狩獵の日、行衛不明になつて奴國の宮を騒がせた。彼は十數日の間深い山々を廻つてゐた。さうして、彼は不彌へ出た。曾てあの不彌の宮で生命を断たれようとした若者は彼であつた。

「長羅よ、見よ、奴國の女は美しい。」君長は云つて踊る婦女達を指差した。「我は爾に妻

を與へよう。爾は爾の好む女を捜せ。」

長羅の父の君長は、妃を失つて以來、饗宴を催すことが最大の慰藉であつた。何ぢなら、それは彼の面前で踊る婦女達の間から、彼は彼の欲する淫蕩な一夜の肉體を選択するに自由であつたから。さうして、彼は、回を重ねるに従つて常に一夜の肉體を捜し得た。今又彼は、櫓の上から二人の婦女に眼をつけた。

「見よ、長羅、彼方の女の踊りは美事であらう。」

長羅の細まつた憂鬱な眼は、踊りを外れて森の方を眺めてゐた。君長は空虚の酒盃を持つたまま、忙しさうに踊りの中へ眼を走らせながら、再び一人の婦人を指差して云つた。「彼方の女は子を産む猪のやうに太つてゐる。見よ、長羅、彼方の女は子を胎んだ冬の狐のやうに太つてゐる。」

饗宴は酒甕から酒の減るにつれて亂れて來た。鹿は酔ひ潰れた若者達の間を漫歩しながら酸漿草の葉を食べた。やがて、一團の若者達は裸體になつて、榊の枝を振りながら婦人達の踊りの中へ流れ込んだ。このとき、人波の中から、絶えず櫓の上の長羅の顔を見詰めてゐる女が二人あつた。一人は踊りの中で、君長の視線の的になつてゐた濃艶な若い太夫の妻であつた。一人は松明の明りの下で、兄の訶和郎と並んで立つてゐる兵部の宿禰の娘、香取

であつた。彼女は奴國の宮の乙女達の中では、その美しい氣品の高さに於て嶄然として優れてゐた。

「あ、長羅、見よ、彼方に爾の妻がゐる。」と、君長は云つて長羅の肩を叩きながら、香取の方を指差した。

香取の氣高き顔は松明の下で、淡紅の朝顔のやうに赧らんで俯向いた。

「王子よ、私の酒盃を爾は受けよ。」と、兵部の宿禰は傍から云つて、馬爪で作つた酒盃を長羅の方へ差し延べた。何ぢなら、彼の胸中に長く潜まつてゐた最大の希望は、今漸く君長の唇から流れ出たのであつたから。

併し、長羅の頭首は重く黙つて横に振られた。彼の眼の向けられた彼方では、松明の一塊が火串の藤蔓を焼き切つて、赤々草の上へ崩れ落ちた。一疋の鹿は飛び上つた。さうして、踊りの中へ角を傾けて馳け込んだ。

「父よ、我は臥所を欲する。我を赦せ。」

長羅は一人立ち上つて櫓を降りた。彼は人波の後をぬけ、神庫の前を通つて暗い櫓の下まで來かゝつた。そのとき、踊りの群から脱け出した一人の女が、彼の後から馳けて來た。彼女は太夫の若い妻であつた。

「待て、王子よ。」と彼女は云つた。

長羅は立ち停つて後を向いた。

「我は爾の歸るを、月と星とに祈つてゐた。」

長羅は黙つて再び母屋の方へ歩いていつた。

併し、長羅の足はこまらなかつた。

「あ、王子よ。爾は我に言葉をかけよ。爾は吾を森へ伴なへ。我は我の祈りのために、再び爾を櫓の上で見た。」

そのとき、二人の後から一人の足音が馳けて來た。それは女の良人の瘦せ細つた若い太夫であつた。彼は蒼ざめた顔をして慄へながら長羅に云つた。

「王子よ、女は我の妻である。願くば妻を斬れ。」

長羅は黙つて母屋の階段に足をかけた。太夫の妻は長羅の腕を握つてひきこめた。

「王子よ。我を伴なへ、我は今宵とともに死ぬるであらう。」

大夫は妻の首を掴んで引き戻さうとした。

「爾は我を欺いた。爾は狂つた。」

「放せ、我は爾の妻ではない。」

「あ、妻よ、爾は我を欺いた。」

太夫は妻の髪を掴んで引き伏せようとしたときに、再び新しい一人の足音が、蹠踏めきながら三人の方へ馳けて來た。それは酒盞を片手に持つた長羅の父の君長であつた。彼は踏み込む土を片頬に塗りつけて起き上つた。

「女よ、我は爾を捜してゐた。爾の踊りは何者よりも美事であつた。來れ、我は今宵爾に奴國の宮を與へよう。」

君長は女の腕を握つて階段を昇つていつた。大夫は女の後から馳け登るこ、再び妻の手を持つた。

「王よ、女は我の妻である。妻を赦せ。」

「爾の妻か。良し。」

君長は女を放して劍を抜いた。大夫の首は地に落ちた。續いて胴が高縁に倒れるこ、杉菜の中に靜まつてゐる自分の首を覗いて動かなかつた。

「來れ。」と君長は女に云つてその手を持つた。

「王子よ、王子よ、我を救へ。」

「來れ。」

女は君長を突き跳ねた。君長は大夫の胴の上へ仰向きに倒れるこゝ、露はな二本の足を空間に跳ねながら起き上つた。彼は酒氣を吐きつゝ、その劍を振り上げた。
「王子よ、王子よ。」

女は呼びながら長羅の胸へ身を投げかけた。が、長羅の身體は立木のやうに堅かつた。劍は降りた。女の肩は二つに裂けるこゝ、良人の胴を叩いて轉がつた。
「長羅よ、酒樂は彼方である。朝はまだ來ぬ。行け、女は彼方で待つてゐる。」

君長は劍を下げたまゝ、松明の輝いた草野の方へ、再び蹠踏めきながら第二の女を捜しに行つた。

長羅は突き立つたまゝ、二つの死體を眺めてゐた。さうして、彼は西の方を眺めるこゝ、
「卑彌呼。」こゝ一言呟いた。

五

奴國の宮の鹿_こ馬_こはだん、くゝこ肥えて來た。しかし、長羅の頬は日々に落ち込んだ。彼は夜が明けると、櫓の上へ昇つて不彌_{ふみ}の國の山を見た。夜が昇ると頭首を垂れた。さうして、彼の唇からは、微笑_こ言葉が流れた星のやうに消えて行つた。彼のこの憂鬱に最も

愁傷した者は、彼を愛する叔父の祭司の宿禰_こ、香取を愛する兵部の宿禰の二人であつた。ある日、祭司の宿禰は、長羅の行衛不明_こなつたこゝき彼の行衛を占はせた咒禁師を再び呼んで、長羅の病を占はせた。廣間の中央には忍冬の模様を描いた大きな薰爐が据ゑられた。その中の、夢_こ殼の焼粉の黄色い灰の上では、櫻の枝_こ鹿の肩骨_こが積み上げられて燃え上つた。咒禁師はその立ち籠めた煙の中で、片手に玉串を上げ、片手に抜き放つた劍を持つて舞を舞つた。さうして、彼は薰爐の上で波紋を描く煙の文を見詰めながら、今や巫祝_{かんざ}の言葉を傳へようとした時、突然、長羅は彼の傍へ飛鳥のやうに馳けて來た。彼は咒禁師の劍を奪ひこるこゝ、再び萩の咲き亂れた庭園の中へ馳け降りた。さうして、彼は臺に戯れかゝつてゐる一疋の牝鹿を見こめるこゝ、一撃のもこにその首を斬り落して咒禁師の方を振りい向た。
「來れ。」

呆然_こしてゐた咒禁師は、慄へながら長羅の傍へ近寄つて來た。

「我の望は西にある。いかゞ」

「あゝ、王子よ。」こゝ、咒禁師は云ふこゝ、彼の慄へる唇は紫の色に變つて來た。

長羅は血の滴る劍を彼の胸さきへ差し向けた。

「云へ、我の望は西にある。良きか。」

「良し。」

「良きか。」

「良し。」と云ふに、咒禁師は仰向きに嫁菜の上へ覆つた。

長羅は劍をひつ下げたまゝ、蒸被を押し開けて、八尋殿の君長の前へ馳けていつた。そこでは、君長は、二人の童男に鹿の毛皮を着せて、交尾の眞似をさせてゐた。

「父よ、我に兵を與へよ。」

「長羅、爾の顔は瓜のやうに青ざめてゐる。爾は猪こ鶴こを食へ。」

「父よ、我に兵を與へよ。」

「聞け、長羅、猪は爾の頬を脹らせるであらう。鶴は爾の顔を朱に染めるであらう。爾の母は我に猪こ鶴こを食はしめた。」

「父よ、我は不彌を攻める。我に爾は兵を與へよ。」

「不彌は海の國、爾は鹽を奪ふか。」

「奪ふ。」

「不彌は玉の國。爾は玉を奪ふか。」

「奪ふ。」

「不彌は美女の國、爾は美女を奪うて歸れ。」

「我は奪ふ、父よ、我は奪ふ。」

「行け。」

「あゝ、父よ、我は爾に不彌の寶を持ち歸るであらう。」

長羅は君長の前を下るに、兵部の宿禰を呼んで、直ちに兵を召集するに彼に命じた。しかし、兵部の宿禰は、此の突然の出兵が、娘、香取の上に何事か悲しむ可き結果を齎すであらうことを洞察した。

「王子よ、爾は一戦にして勝たんことを欲するか。」

「我は欲す。」

「然らば、爾は我が言葉に従つて時を待て。」

「爾は老者、時は壯者にこりては無用である。」

「やめよ。我の言葉は、爾の希望のごとく重いであらう。」

長羅は唇を咬み締めて宿禰を見詰めてゐた。宿禰は吐息を吐いて長羅の前から立ち去つた。

奴國の宮からは、面部の球形の刺青を塗り潰された五人の使部が、偵察兵となり不彌の國へ發せられた。さうして、森からは弓材になる檀や槻や梓が切り出され、鹿矢の骨片の矢の根は征矢の雁股になつた矢鏃をこり變へられた。猪の脂を松脂を煮溜めた藥煉は弓弦を強めるために新らしく武器庫の前で製せられた。兵士達は、この常は變つて悠悠閑々とした戦ひの準備を心竊に嗤つてゐた。しかし、彼らの一人にして、娘を憶ふ兵部の宿禰の計畫を洞察し得た者は、誰もなかつた。

偵察兵の歸りを待つ長羅の顔は、興奮と熱意のために、再び以前のやうに男々しく逞しく輝き出した。彼は終日武器庫の前の廣場で、馬を走らせながら劍を振り、敵陣めがけて突入する有様を真似てゐた。しかし、卑彌呼を奪ふ日が、尙依然として判明せぬ焦燥さに耐へ得るこゝが出来なくなるに、彼は一人國境の方へ偵察兵を迎ひに馬を走らせた。

或る日、長羅は國境の方から歸つて來るに、泉の傍に立つてゐた兵部の宿禰の子の訶和郎が彼の方へ進んで來た。彼は長羅の馬の擴つた鼻孔を指差して彼は云つた。

「王子よ、爾は爾の馬に水を飲ましめよ。爾の馬の呼吸は切れてゐる。」

長羅は彼に従つて馬から降りた。そのとき、一人の乙女が垂れ下つた柳の絲の中から、慄へる兩腕に水甕を持つて現れた。それは兵部の宿禰の命を受けた訶和郎の妹の香取であつた。彼女は美しく装ひを凝した淡竹色の裳裾を曳きながら、泉の傍へ近寄つて水を吸んだ。彼女の肩から迂り落ちた一束の黒髪は、差し延べた白い片腕に絡まりながら、太陽の光りを受けた明るい泉の水面へ擴つた。長羅は馬の手綱を握つたま、彼女の姿を眺めてゐた。彼女は吸み上げた水甕の水を長羅の馬の前へ靜に置くに、赧らめた顔を俯向けて、垂れ下つた柳の絲を胸の上で結び始めた。

やがて、馬は水甕の中から頭を上げた。

「奴國の宮で、もつこも美しき者は爾である。」長羅は云ふに、馬の上へ飛び乗つた。香取の一層赧らんだ氣高い顔は柳の絲で隠された。馬は再び王宮の方へ馳けて行つた。併し、長羅は武器庫の前まで來たときに、三人の兵士が水甕の中へ毒空木の汁を搾つてゐるのを眼にこめた。

「爾の汁は？」長羅は馬の上から彼らに訊いた。

「矢鏃に塗つて、不彌の者を我らは攻める。」彼らの一人は彼に答へた。

長羅の眼には、その矢を受けて倒れてゐる卑彌呼の姿が浮び上つた。彼は鞭を振り上げ

て馬の上から飛び降りた。兵士達は跪拜した。

「王子よ、赦せ、我らの毒は、直ちに一人を殺すであらう。」と一人は云つた。

長羅は毒壺を足で蹴つた。泡を立てた緑色の汁は、倒れた壺から草の中へ滲み流れた。

「王子よ、赦せ、我らに命じた者は宿禰である。」と、一人は云つた。

忽ち毒汁の泡の上には、無数の山蟻の死骸が浮き上つた。

七

不彌の國から一人の偵察兵が奴國の宮へ歸つて來た。彼は、韓土から新羅の船が、寶鐸と銅劍ミを載せて不彌の宮へ來ることを報告した。長羅は直ちに出兵の準備を兵部の宿禰に促した。併し、宿禰の頭は重々しく横に振られた。

「爾は奴國の弓弦の弱むを欲するか。」と、長羅は云つて詰め寄つた。

「待て、歸つた偵察兵は一人である。」

長羅は沈黙した。さうして、彼は、嘆息する宿禰の頭の上で、不彌の方を仰いで嘆息した。

六日目に第二の偵察兵が歸つて來た。彼は、不彌の君長が投馬の國境へ狩獵に出ることを

を報告した。

長羅は再び兵部の宿禰に出兵を迫つて云つた。

「宿禰よ、機會は我らの上に来た。爾は最早や口を閉ぢよ。」

「待て。」

「爾は武器庫の扉を開け。」

「待て、王子よ。」

「宿禰、爾の我に教ふる戦法は？」

「王子よ、狩獵の日は危険である。」

「やめよ。」

「狩獵の日の警戒は數倍する。」

「やめよ。」

「王子よ、爾の必勝の日は他日にある。」

「爾は必勝を敵に與ふることを欲するか。」

「敵に與ふるものは劍。」

「爾は我の敗北を願ふ者。」

「我は爾を愛す。」

三〇

長羅は鹿の御席の毛皮を宿禰に投げつけて立ち去つた。

宿禰はその日、漸く投げ槍ミ楯ミの準備を兵士達に命令した。

四日がたつた。さうして、第三の偵察兵が奴國の宮へ歸つて來た。彼は、不彌の宮では、主女卑彌呼の婚姻が数日の中に行はれることを報告した。長羅の顔は、見る／＼中に蒼ざめた。

「宿禰、銅鑼を鳴らせ、法螺を吹け、爾は直ちに武器庫の扉を開け。」

「王子よ。我らの聞いた三つの報導は違つてゐる。」

長羅は無言のまゝ、宿禰を睥んで突き立つた。

「王子よ、二つの報告は残つてゐる。」

長羅の唇ミ兩手は慄へて來た。

「待て、王子よ、長き時日は、重き寶を齎すであらう。」

長羅の劍は宿禰の上で閃いた。宿禰の肩は耳ミ一緒に二つに裂けた。

間もなく、兵士を召集する法螺ミ銅鑼が奴國の宮に鳴り響いた。兵士達は八方から武器庫へ押し寄せて來た。彼らの中には、弓ミ劍ミ楯ミを持つた訶和郎の姿も混つてゐた。彼

は、この不意の召集の理由を父に訊き正さんがために、ひそり王宮の中へ這入つていつた。併し、寂寞ミした廣間の中で彼の見たものは、御席の上に血に塗れて倒れてゐる父の一つの死骸であつた。

「あ、父よ。」

彼は楯ミ弓ミを投げ捨て、父の傍へ馳け寄つた。彼は父の死の理由の總てを識つた。彼は血潮の中に落ちてゐる父の耳を見た。

「あ、父よ、我は復讐するであらう。」

彼は父の死體を抱き上げようとした。ミ、父の片腕は衣の袖の中から轉がり落ちた。

「待て、父よ、我は爾に代つて復讐するであらう。」

訶和郎は血の滴る父の死體を脊負ふミ、馳せ違ふ兵士達の間をぬけて、ひそり家の方へ歸つて來た。

やがて、太陽は落ちか、つた。さうして、長羅を先驅に立てた奴國の軍隊は、兵部の宿禰の家の前を通つて不彌の方へ進軍した。訶和郎の血走つた眼ミ、香取の泣き濡れた眼ミは、泉の傍から、森森の濃綠色の團塊に切られながら、長く霜のやうに輝いて動いて行く兵士達の鋒先を見詰めてゐた。

不彌の宮には、王女卑彌呼の婚姻の夜が来た。卑彌呼は寢殿の居室で、三人の侍女を使ひながら式場に出る可き装ひを整へてゐた。彼女は齋杭に懸つた鏡の前で、兎の背骨を焼いた粉末を顔に塗るこ、その上から辰砂の粉を兩頬に掃き流した。彼女の頭髮には、山鳥の保呂羽を雪のやうに降り積もらせた冠の上から、韓土の瑪瑙と翡翠を連ねた玉鬘が懸かつてゐた。侍女の一人は白色の絹布を卑彌呼の肩に着せかけて云つた。

「空の下で、最も美しき者は我の姫。」

侍女の一人は卑彌呼の胸へ琅玕の勾玉を垂れ下げて云つた。

「地の上の日輪は我の姫。」

橘と柿の植つた庭園の白洲を包んで、篝火が赤々こ燃え上るこ、不彌の宮人達は各々手に數枚の柏の葉を持つて白洲の中へ集つて来た。やがて、琴と笛と法螺貝が緩やかに王宮の根の方から響いて来た。十人の太夫が手火をか、げて白洲の方へ進んで来た。續いて、幢を持つた三人の宿禰が進んで来た。それに續いて、劍を抜いた君長が、鏡を抱いた王妃が、さうして、卑彌呼は、管玉をかけ連ねた瓊牙を持つた卑彌呼の大兄と並んで、白い孔雀

のやうに進んで来た。宮人達は歡呼の聲を上げながら、二人を目がけて柏の葉を投げた。白洲の中央では、王妃のかけた眞澄鏡が、石の男根に吊り下がつた幣の下で、松明の焰を映して朱の満月のやうに輝いた。その後の四段に分れた白木の棚の上には、野の青物が一段に、山の果實と鳥類とが二段目に、鮠や鰈や鯉や鯰の川の物が三段に、さうして、海の魚と草とは四段の段に並べられた。奏樂が起り、奏樂がやんだ。君長は鏡の前で、劍を空に指差して云つた。

「あ、無窮なる天上の神々よ、吾らの祖先よ、二人を守れ。あ、廣大なる海の神々よ、地の神々よ、二人を守れ、あ、爾ら忠良なる不彌の宮の臣民よ、二人を守れ、不彌の宮は、爾らの守護の下に、明日の日輪のごこく榮えるであらう。」

周圍の宮人達の手が白い波のやうに搖れるこ、再び一齊に柏の葉が投げられた。卑彌呼と卑彌呼の大兄は王宮の人々に包まれて、奏樂に送られながら、白洲を埋めた青い柏の葉の上を寢殿の方へ返つていつた。群衆は歡びの聲を上げつ、彼等の後に動搖めいた。手火や松明が入り亂れた。さうして、王宮からは、醜や諸白酒が鹿や猪の肉片と一緒に運ばれるこ、白洲の中央では、薙草の實を髪飾りとなした鈿女らが山韭を振り乍ら、酒樂の唄を謡ひ上げて踊り始めた。やがて、酒宴と舞踏は深まつた。威勢良き群衆は合唱から叫喚へ變

つて来た。さうして、夜の深むにつれて、彼らの騒ぎは叫喚から呻吟へ落ちて来る。次第に光りを失ふ篝火と一緒に、不彌の宮の群衆は、間もなく曉の星の下で、眩く巨大な獣のやうに見えて来た。

そのとき、突然武器庫から火が上つた。ミ、同時に森の中からは、一齊に閃の聲が群衆めがけて押し寄せた。それに應じて磯からは、長羅を先驅に立てた一團が、花壇を突き破つて宮殿の方へ突撃した。不彌の宮の群衆は、再び脊のやうに騒ぎ立つた。松明は消えかかつたまゝ、酒盞や祝盃と一緒に飛び廻つた。さうして、投げ槍の飛び交ふ下で、鉾や劍が撒かれた氷のやうに輝くミ、人々の身體は手足を飛ばして間断なく地に倒れた。

長羅はひこり轉がる人波を蹴散らして宮殿の中へ近づくと、贅殿の戸を突き破つて寢殿の方へ馳け込んだ。廣間の蒸被を押し開けた。八尋殿を横切つた。さうして、奥深い一室の布被を引きあけるミ、そこには、白い羽毛の蒲團に被はれた卑彌呼が、卑狗の大兄の腕の中で眠つてゐた。

「卑彌呼。」長羅は入口に突き立つた。

「卑彌呼。」

卑狗の大兄ミ卑彌呼ミは、巢を亂された鳥のやうに跳ね起きた。

「去れ。」ミ叫ぶミ、大兄は齋杭に懸つた鹿の角を長羅に向つて投げつけた。

長羅は劍の尖で鹿の角を跳ねのけるミ、卑彌呼を見詰めたまゝ、飛びかゝる虎のやうに小腰を蹲めて忍び寄つた。

「去れ、去れ。」

長羅に向つて鏡が飛んだ。玉が飛んだ。しかし、彼は無言のまま、卑彌呼の方へ近か寄つた。大兄は卑彌呼を後に守つて彼の前に立ち塞がつた。

「爾は何故にこゝへ来た。」

ミ、大兄は云ふミ、彼の胸には長羅の劍が刺さつてゐた。彼は叫びを上げるミ、その劍を握つて後へ反つた。

「あゝ、大兄。」

卑彌呼は良人を抱きかゝへた。大兄の胸からは、血が赤い花のやうに噴き出した。長羅は卑彌呼の肩に手をかけた。

「卑彌呼。」

「ああ、大兄。」

卑狗の身體は卑彌呼の腕の中へ崩れかゝつて息が絶えた。

「我は爾を奪ひに不彌へ來た。卑彌呼、我ごごもに爾は奴國へ來れ。」
長羅は卑彌呼を抱き寄せようとした。

「大兄、大兄。」と彼女は云ひ乍ら、卑狗の大兄を抱いたまゝ、床の上へ泣き崩れた。

そのとき、奴國の兵士達は血に濡れた劍を下げて、長羅の方へ亂入して來るまじ口に叫び合つた。

「我は王を殺した。」

「我は王妃を刺した。」

「不彌の鏡を我は奪つた。」

「我は寶劍と玉を掠つた。」

長羅は卑彌呼を床の上から抱き上げた。

「我は爾を奪ふ。」

彼は卑狗の大兄を卑彌呼の腕から踏み放すまゝ、再び宮殿を突きぬけて廣場の方へ馳け出した。卑彌呼は長羅の腕の中から、小枝を拂つた根の枝に、上顎をかけられた父と母との死體が魚のやうに下つてゐるのを眼にこめた。

「あゝ、我を刺せ。」

焔の家となつた武器庫は、轉つてゐる死體の上へ轟然たる響を立て、崩れ落ちた。長羅は卑彌呼を抱きかゝ、へたまゝ、ひらり馬の上へ飛び乗つた。

「去れ。」

彼は馬の腹をひき蹴り蹴つた。馬は石のやうに轉つてゐる人々の頭を蹴散して、森の方へ馳け出した。それに續いて、血に塗られた奴國の兵の鋒尖が、最初の朝日の光りを受けてきらめきながら、森の方へ揺れて來た。

「卑彌呼。」と長羅は云つた。

「あゝ、我を刺せ。」

彼女は馬の背の上で昏倒した。

「卑彌呼。」

馬は走つた。葎と薊の花を踏みにぢつて奴國の方へ馳けていつた。

「卑彌呼。」

「卑彌呼。」

遠く人馬の騷擾が闇の中から聞えて来た。訶和郎も香取は戶外に立つて峠を見るも、松明の輝きが、河に流れた月のやうに長くちらく／＼ゆらめいて宮の方へ流れて来た。それは不彌の國から引き上げて来た奴國の兵士達の明りであつた。訶和郎も香取は忍竹を連ねた簀垣の中に身を潜めて、彼らの近づくのを待つてゐた。

やがて、兵士達のざわめきが次第に二人の方へ近寄つて来るも、その先達の松明の後から、馬の上で一人の動かぬ美女を抱きかゝ、へた長羅の姿が眼についた。訶和郎は劍を抜いて飛び出ようとした。

「待て、兄よ。」香取は云つて、訶和郎の腕を後へ引いた。

先達の松明は簀垣の前へ來かゝつた。美女の片頬は、松明の光りを受けて病める鶴のやうに長羅の胸の上に垂れてゐた。

訶和郎は劍を握つたまゝ、長羅の顔から美女の顔へ眼を流した。するも、憤怒に燃えてゐた彼の顔は、次第に火を見る嬰兒の顔のやうに弛んで來て口を解いた。さうして、彼の厚い二つの唇は、兵士達の最後の者が、跛足を引いて朱實を食べながら、宮殿の方へ去つて行つても開いてゐた。しかし、間もなく、兵士達の松明が、宮殿の草野の上で圓く火の小山を築きながら燃え上るも、訶和郎の唇は引きしまり、再び彼の両手は劍を持った。

「待て、兄よ。」

物に怯えたやうに、香取の體は軽く搖れた。しかし、訶和郎の姿は闇の中を夜蜘蛛のやうに宮殿の方へ馳け出した。

「あゝ、兄よ。」香取は云ふも、彼女の悲歎の額は重く數本の忍竹へ傾きかゝり、さうして、再び地の上へ崩れ伏した。

十

訶和郎は兵士達の間を脱けるも、宮殿の母屋の中へ這入つていつた。さうして、廣間の裏へ廻つて尾花で編んだ玉簾の隙間から中を覗いた。

廣間の中では、君長は二人の宿禰も、數人の童男も使部もを傍に從へて、前方の蒸被の方を眺めてゐた。數箇の燈油の皿に燃えてゐる灯火は、一樣に君長の方へ搖れてゐた。暫くして、そこへ、數人の兵士達を從へて現れたのは長羅であつた。

「父よ。我は勝つた。我は不彌の宮の南北から襲め寄せた。」長羅は云つた。

「美女は何處か。」

「父よ。我は不彌の宮に立てる生き物を残さなかつた。我は王を殺した、王妃を刺した。」

「美女をこつたか。」

「美女をこつた。さうして、寶劍と鏡をこつた。我の奪つた寶劍を爾は受けよ。」

「美女は何處か。不彌の美女は潮の匂ひがするであらう。」

長羅は兵士達の持つて來た劍と、葶の袋の中からこり出した鏡と琅玕の勾玉を父の前に並べて云つた。

「父よ。爾は爾の好む寶を選べ。寶劍は韓土の鐵。奴國の武器庫を飾るであらう。」

「長羅よ。我は爾の殊勳に爾の好む寶劍を與へるであらう。我に美女を見せよ。不彌の美女は何處にゐるか。」

君長は御席の上から立ち上つた。長羅は一人の兵士に命じて言つた。

「連れよ。」

卑彌呼は後に劍を抜いた數人の兵士に守られて、廣間の中へ連れられた。君長は卑彌呼を見るに、獸慾に聲を失つた笑顔の中から今や手を延さんと思はれるばかりに、その肥えた體軀を揺り動かして彼女に云つた。

「不彌の女よ。爾は奴國を好むか。我もこもに、奴國の宮にこまされ。我は爾に爾の好む何物をも與へるであらう。爾は亥猪を好むか。奴國の亥猪は不彌の鹿より脂を持つであらう。」

不彌の女よ。我を見よ。我は王妃を持たぬ。爾は我の王妃になれ。我は爾の好む蛙と鯉とを與へるであらう。我は加羅の翡翠を持つてゐる。」

「奴國の王よ、我を殺せ。」

「不彌の女よ。我の傍に來れ。爾は奴國の誰よりも美しい。爾は鏝を好むか。我の妻は黄金の鏝を残して死んだ。爾は鏝を爾の指に嵌めてみよ。來たれ。」

「奴國の王よ。我を不彌に返せ。」

「不彌の女よ。爾は奴國の宮を好むであらう。我もこもにゐよ。奴國の月は田鶴のやうに冠物を冠つてゐる。爾は奴國の月を眺めて、我もこもに山蟹と雁を食へ。奴國の山蟹は赤い卵を胎んでゐる。爾は赤い卵を食へ。山蟹の卵は爾の腹から我の強き男子を産ますであらう。來たれ。我は爾のごき美しき女を見たことがない。來たれ。我もこもに我の室へ來りて、酒盞を干せ。」

君長は刈薦の上に萎れてゐる卑彌呼の手をこつた。長羅の顔は刺青を浮かべて蒼白く變つて來た。

「父よ。何處へ行くか。」

「酒宴の用意は宜きか。長羅よ。爾の持ち歸つた不彌の寶は美事である。」

「父よ。」

「長羅よ。我は爾のために新らしき母を與へるであらう。爾は臥所へ這入つて、戦ひの疲れを憩へ。」

「父よ。」長羅は君長の腕から卑彌呼を奪つて突き立つた。「不彌の女は我の妻。我は妻を捜しに不彌へ行つた。」

「長羅、爾は我を欺いた。不彌の女よ。我に來れ。我は爾を嫁りに長羅を遣つた。」

「父よ。」

「不彌の女よ。我こそにも來れ。我は爾を奴國の何物よりも愛でるであらう。」

君長は卑彌呼の手を引き乍ら長羅を突いた。長羅は劍を抜くこゝ、君長の頭に斬りつけた。君長は燈油の皿を覆して匂玉の上へ轉がつた。殿中は君長の周圍から騒ぎ立つた。

政司の宿禰は立ち上るこゝ劍を抜いて、長羅の前に出た。

「爾は王を殺害した。」

長羅は宿禰を睥んで肉迫した。忽ち廣間の中の人々は、宿禰と長羅の二派に分れて争つた。見る間に手こ足こ、角髪を解いた數個の首こが斬り落された。燈油の皿は投げられたさうして、室の中は暗くなるこゝ、跳ね上げられた鹿の毛皮は、閃めく劍の刀さきの上を踊

り乍ら放埒に飛び廻つた。

卑彌呼は蒸被を手探りながら闇にまぎれて、尾花の玉簾を押し分けた。その時、玉簾の後に今まで身を潜めてゐた訶和郎は、八尋殿の廻廊から洩れくる松明の光に照されて、突然に浮き出た不彌の女の顔を目にこめた。

「姫よ、待て。」

こ訶和郎は云ふこゝ、廣間の中へ飛び込まうこゝしてゐたその身を屈して彼女を横に抱き上げた。さうして、彼は宮殿の庭に飛び下り、既の前へ馳けて行くこゝ、卑彌呼の耳に口を寄せて囁いた。

「姫よ、我と共に奴國を逃げよ。王子の長羅は、我と爾の敵である。爾を奪はゞ彼は我を殺すであらう。」

一頭の栗毛に鞭が上つた。馬は闇から闇へ二人を乗せて、奴國の宮を蹴り捨てた。

長羅は蒸被の前へ追ひつめた宿禰の肩を斬り下げた。さうして、劍を引くこゝ、「卑彌呼、卑彌呼。」こ呼び乍ら、部屋の中を馳け廻り、布被を引き開けた。玉簾を跳ね上げた。庭園へ飛び下りて、萩の葉叢を薙ぎ倒しつゝ、廣場の方へ馳けて來た。

「不彌の女は何處へ行つた。捜せ。不彌の女を捕へたものは宿禰にするぞ。」

再び庭に積まれた松明の小山は、馳け集つた兵士達の鋒尖に突き刺されて崩された。さうして、奴國の宮を、吹かれた火の子のやうに八方へ飛び散るこ、次第に疎に擴り乍ら動搖めいた。

十一

訶和郎の馬は狭ばまつた谷間の中へ踏み這入つた。前には直立した岩壁から逆様に楠の森が下つてゐた。訶和郎は馬から卑彌呼を降して彼女に云つた。

「馬は進まず。姫よ、爾は我ごごもに今宵をすごせ。」

「追ひ手は如何。」

「良し、姫よ。我は奴國の宿禰の子。我の父は長羅のために殺された。爾を奪ふ兵士を奴國の宮に滯めて殺された。長羅は我の敵である。もし爾が不彌の國になかりせば、我の父は我ごごもに今宵を送る。爾は我の敵である。」

「我の良人は長羅の劍に殺された。」

「我は知らず。」

「我の父は長羅の兵士に殺された。」

「我は知らず。」

「我の母は長羅のために殺された。」

「やめよ、我は爾の敵ではない。爾は我の敵である。不彌の女。我は爾を奪ふ。我は長羅に復讐のため、我は爾に復讐のため、我は爾を奪ふ。」

「待て。我の復讐は残つてゐる。」

「不彌の女。」

「待て。」

「不彌の女。我の願ひを容れよ。然らずば、我は爾を刺すであらう。」

「我の良人は我を残して死んだ。我の父ご母ごは、我のために殺された。ひこり残つてゐる者は我である。刺せ。」

「不彌の女。」

「刺せ。」

「我に爾があらざれば、我は死するであらう。我の妻になれ。我ごごもに生きよ。我に再び奴國の宮へ歸れご爾は云ふな。我を待つ物は劍であらう。」

「待て。我の復讐は残つてゐる。」

「我は復讐するであらう。我は爾に代つて、父に代つて復讐するであらう。」
「するか。」

「我は復讐する。我は長羅を殺す。」
「するか。」

「我は爾の夫に代つて、爾の父と母に代つて復讐する。」
「するか。」

「我は爾を不彌と奴國の王妃にする。」

その夜二人は婚姻した。頭の上には、蘭を飾つた藤蔓と、数條の葛が樺の枝から垂れ下つてゐた。二人の臥床は羊齒と葦と刈萱とであつた。さうして卑彌呼は、再び新しい良人の腕の中に身を横たへた。訶和郎は馬から鹿の毛皮で造られた馬氈を降して、その妻の脊にかけた。月は昇つた。訶和郎は奴國の追ひ手を警戒するために、劍を抜いたまま眠らなかつた。鼯鼠は楠の穴から出てくるこ、ひこり枝々の間を飛び渡つた。月の映る度毎に、鼯鼠の眼は青く光つて輝いた。さうして訶和郎の二つの眼と劍の刃は、山葦と刈萱の中で輝いた。

その時、突然、卑彌呼は身を顛はせて訶和郎の腕の中で泣き出した。

十二

その夜から、奴國の野心ある多くの兵士達は、不彌の女を捜すために宮を發つた。彼らの中に荒甲と云ふ一人の兵士があつた。彼の額から片頬にかけて、田蟲が根強く巢を張つてゐたために、彼の球形の刺青は、奴國の誰よりも淡かつた。彼は卑彌呼が遁走した三日目の眞晝に、森を脱け出た河原の岸で、馬の嘶きを聞きつけた。彼は芒を分けてその方へ近づくと、馬の傍で、足を洗つてゐる不彌の女の姿が見えた。荒甲は脊を延ばして馳け寄らうとした時に、兎と沙魚とを携げた訶和郎が芒の中から現れた。

「あ、爾は荒甲、不彌の女を爾は見たか。」

荒甲は黙つて不彌の女の姿を指さした。訶和郎は荒甲の首に手をかけた。こ、荒甲の身體は、飛び散る沙魚と兎とこもに、芒の中に轉がされた。訶和郎は石塊を抱き上げるこ、起き上らうとする荒甲の頭を目覚めて投げつけた。荒甲の田蟲は眼球と一緒に飛び散つた。さうして、芒の莖にたかるこ、濡れた鶏頭のやうにひらくこゆらめいた。訶和郎は死體になつた荒甲の胴を一蹴りに蹴るこ、追手の登音を聞くために、地にひれ伏して苔の上に耳をつけた。彼は妻の傍にかけていつた。

「奴國の追手が近づいた。乗れ。」

馬は卑彌呼と訶和郎を乗せて瀬を渡つた。數羽の山鴨と雀の群れが柳の中から飛び立つた。前には白雲を柳曳かせた連山が眞菰と芒の穂の上に連つてゐた。

「かの山々は。」

「不彌の山。」

「追手は不彌へ廻るであらう。」

「廻るであらう。」

卑彌呼は訶和郎と共に不彌に残つた兵士達を集めて奴國へ征め入る計畫を立てゝゐた。しかし、二人を乗せた馬の頭は進むに従ひ、不彌を外れて邪馬臺の方へ進んでいつた。秋の光りは訶和郎の背中に廻つた衣の結び目を中心として、羽毛の畑のやうな芒の穂波の上に明るく降り注いだ。さうして、微風が吹くに、一樣に背を曲げる芒の上から、首を振りつゝ進む馬の姿が一段と空に高まつた。空では鶉子と鳶子が圓く空中の持ち場を守つて飛んでゐた。

十三

その夜二人は數里の森を、二つの峰を越して小山の原に到着した。そこには椎と蜜柑が茂つてゐた。猿は二人の頭の上を枝から枝へ飛び渡つた。訶和郎は野犬と狼をを防ぐために、榎を焚いた。彼等は、數日來の経験から、追手の眼より野獸の牙を恐れねばならなかつた。卑彌呼はひそり訶和郎に添つて身を横たへ乍ら目覺めてゐた。なぜなら、その夜は彼女の夜警の番であつたから。夜は更けた。彼女は椎の梢の上に、群つた笹葉の上に、さうして、靜な暗闇に垂れ下つた藤蔓の隙々に、亡き卑狗の大兄の姿を見た。

卑狗の大兄の幻が彼女の眼から消えてゆくに、彼女は涙に濡れ乍ら、再び燃え盡きる榎の上へ新らしく枯枝を盛り上げた。猿の群れは梢を下りて焚火の周圍に集つて來た。さうして、彼女が枯枝を火に差し燻べる度毎に、彼らも彼女を眞似て差し燻べた。

榎の次第に盡きかけた頃、山麓の闇の中から、突然に地を踏み鳴らす軍勢の響が聞えて來た。卑彌呼は傍の訶和郎を呼び起した。

「奴國の追手が近づいた、逃げよ。」

訶和郎は飛び起る足で焚火を踏み消した。再び兵士達の鯨波の聲が張り上つた。二人は馬に飛び乗るに、立木に突きあたりつゝ、小山の頂上へ馳け登つた。するに、芒の原に掩はれた小山の背面からは、一齊に枯木の林が動揺めき乍ら二人の方へ進んで來た。それ

は牡鹿の群だつた。馬は散亂する鹿の中を突き破つて馳け下つた。こゝ、原の裾から白茅を踏んで一團の兵士が現れた。彼等は一列に並んだまゝ、裾から二人の方へ締め上げる袋の紐のやうに進んで來た。訶和郎は再び鹿の後から頂上へ馳け戻つた。その時、椎こ蜜柑の原の中から、再び新しい鹿の群が頂上へ向つて押し襲せて來た。さうして、訶和郎の馬を混へた牡鹿の群の中へ突入して來るこゝ、鹿の團塊は更に大きく混亂しながら、吹き上げる黒い泡のやうに頂上で動揺いた。しかし、間もなく、渦巻く彼らの團塊は、細長く山の側面に川波のやうに流れていつた。こゝ行手の裾に、兵士達の松明が點々こ輝き出した。さうして、それらの松明は、見る間に一列の弧線を描いて擴がるこゝ、忽ち全山の裾を圓形に取り包んで縮まつて來た。鹿の流れは訶和郎の馬を浮べて逆上した。再び彼らの團塊は、小山の頂で踏み合ひ乗り合ひつゝ、沸騰した。松明を映した鹿の眼は、明滅しながら彈動する無數の玉のやうに輝いた。その時、一つの法螺が松明の中で鳴り渡つた。兵士達の收縮する松明の環は停止した。それと同時に、芒の原の空中からは一齊に矢の根が鳴つた。鹿の群れは悲鳴を上げて散亂した。訶和郎の馬は跳ね上つた。こゝ、訶和郎は卑彌呼を抱いたまゝ、草の上に轉落した。しかし、彼は窪地の中に這ひ降りるこゝ、彼女の楯のやうにひれ伏して矢を防いだ。矢に射られた鹿の群れは、原の上を狂ひ廻つて地に倒れた。忽ち窪地の

底で抱き合ふ二人の脊の上へ、鹿の塊りがひき續いて落ち込むこゝ、間もなく、雜然こして盛り上つた彼らは、突き合ひ蹴り合ひつゝ、次第に靜に死んでいつた。さうして、彼らの傷口から迸る血潮は、石垣の隙間を漏れる泉のやうに滾々こして流れ始めるこゝ、二人の體を染めながら、窪地の底の蘚苔の中まで滲み込んでいつた。

十四

訶和郎こ卑彌呼を包んだ兵士達は、君長に率ゐられて、遠巻きに鹿の群れを巻き包んで來た邪馬臺の國の兵士であつた。彼らは小山の頂上で狂亂する鹿の群れの鎮るのを見るこゝ、松明の持ち手の後から頂きへ馳け登つた。明るく輝き出した頂は、散亂した動かぬ鹿の野原であつた。應て、兵士達は松明の周圍へ盡く集つて來るこゝ、夫々一疋の鹿を引き摺つて再び山の麓の方へ降りていつた。その時、頂上の窪地の傍で群つた一團の兵士達が、血に染つた訶和郎こ卑彌呼を包んで喧騒した。二人を見られぬ人達は、遠く人垣の外で口々に云ひ合つた。

「鹿の中から美女こ美男が湧いて出た。」

「赤い美女が鹿の腹から湧いて出た。」

「鹿の美女は人間の美女よりも美しい。」

聽て、兵士達の集團は、訶和郎と卑彌呼を包んだまゝ、彼等の君長の反耶の方へ進んでいった。

「王よ。」と兵士達の一人は跪拜いて反耶に云つた。「鹿の中から若い男女が現れた。彼らを撃つか。」

君長の反耶は、傍の兵士の持つた松明をとると、頭上に高くかざして二人の姿を眺めてゐた。

「我らは遠く山を越えて來れる不彌の者。我らを放せ。」と訶和郎は云つた。反耶の視線は訶和郎から卑彌呼の方へ流された。

「爾は不彌の國の旅人か。」

「然り。我らは不彌へ歸る旅の者。我らを赦せ。」と卑彌呼は云つた。

「耶馬臺の宮はかの山の下。爾らは我の宮を通つて旅に行け。」

「赦せ。吾らの路は爾の宮より外れてゐる。吾らは明日の旅を急ぐ者。」

反耶は松明を投げ捨てて、兵士達の方へ向き返つた。

「行け。」

兵士達は王の言葉を口々に云ひ傳へて動搖めき立つた。再び小山の頂では地を這へる鹿の死骸の音がした。その時、突然、卑彌呼の頭に浮んだものは、彼女自身の類ひ稀なる美しき姿であつた。彼女は耶馬臺の君長を味方にして、直ちに奴國へ攻め入る計畫を胸に描いた。

「待て、王よ。」と卑彌呼は云ふと、竝んだ蕾のやうな歯を見せて、耶馬臺の君長に微笑を投げた。「爾は吾らを爾の宮に伴なふか。吾らは爾の宮を通るであらう。」

「ああ、不彌の女。爾らは我の宮を通つて不彌へ歸れ。」

「卑彌呼。」と訶和郎は云つた。

「待て、爾は吾に従つて耶馬臺を通れ。」卑彌呼は訶和郎の腕に手をかけた。

「卑彌呼、吾らの路は外れて來た。耶馬臺を廻れば、吾らの望みも廻るであらう。」

「廻るであらう。」

「吾らの望みは急いでゐる。」

「訶和郎よ。耶馬臺の宮は、不彌の宮より奴國へ近い。」

「不彌へ急げ。」

「耶馬臺へ廻れ。」

「卑彌呼。」

五四

訶和郎は、眼を怒らせて、卑彌呼の腕を突き拂つた。その時、今迄反耶の横に立つて、卑彌呼の顔を見續けてゐた彼の弟の片眼の反繪は、小脇に抱いた法螺貝を訶和郎の眉間に投げつけた。訶和郎は蹠踉めき乍ら劍の頭推に手をかけた。反繪の身體は訶和郎の胸に飛びかかつた。訶和郎は地に倒れると、荆を掻つて反繪の顔へ投げつけた。一人の兵士は鹿の死骸で訶和郎を打つた。續いて數人の兵士達の松明は、跳ね上らうとする訶和郎の胸の上へ投げつけられた。火は胸の上で蹴られた花のやうに飛び散つた。

「彼を縛れ。」と反繪は云つた。
數人の兵士達は、藤蔓を持つて一時に訶和郎の上へ押しかむさつた。

「王よ、彼を赦せ、彼は吾の夫、彼を赦せ。」卑彌呼は王の傍へ馳け寄つた。反繪は藤蔓で巻かれた訶和郎の身體を一本の蜜柑の枝へ吊り下げた。卑彌呼は王の傍から訶和郎の下へ馳け寄つた。

「彼を赦せ、彼は我の夫、彼を赦せ。」

反繪は卑彌呼を抱きとめると、兵士達の方を振り返つて彼らに云つた。
「不彌の女を連れよ。山を下れ。」

一團の兵士は卑彌呼の傍へ押し寄せて來た。と、見る間に、彼女の身體は數人の兵士達の頭の上へ浮き上り、跳ね乍ら、蜜柑の枝の下から裾の方へ下つていつた。

訶和郎は垂れ下つたまま蜜柑の枝に足を突つ張つて、遠くへ荷負はれてゆく卑彌呼の姿を睥んでゐた。兵士達の松明は、谷間から煙のやうに流れて來た夜霧の中を揺れていつた。

「妻を返せ。妻を返せ。」

蜜柑の枝は、訶和郎の唇から石榴の粒果のやうな血が滴る度毎に、遠ざかる松明の光りの方へ揺らめいた。その時、兵士達の群から放れて、ひとり山腹へ引き返して來た武將があつた。それはかの君長の弟の反繪であつた。彼は芒の中に立ち停ると、片眼で山上に揺られてゐる一本の蜜柑の枝を狙つて矢を引いた。蜜柑の枝は、一段と闇の中で激しく揺れた。訶和郎の首は、獵人の獲物のやうに矢の刺つた胸の上へ垂れ下つた。間もなく、濃霧は松明の光りの中にぼかしながら、倒れた芒の原の上から靜にだん／＼と訶和郎の周圍へ流れて來た。

十五

耶馬臺の兵士達が彼らの宮へ歸つたとき、卑彌呼はひとり捕虜の宿舎にあてられる石窖

の中に入れられた。それは幸運な他國の旅人に與へられる耶馬臺の國の習慣の一つであつた。彼女の石窖は奥深い石灰洞から成つてゐた。數本の鍾乳石の柱は、鑿打つ高い天井の岩壁から下つてゐた。さうして、僅かに開けられた正方形の石の入口には、太い樺の格子が降され、その前には、背中と胸とに無數の細い蜥蜴の繪でもつて、大きな一つの蜥蜴を刺青した一人の奴隸がつけられてゐた。彼の頭は嫁菜の汁で染められた藍色の苧の布を巻きつけ、腰には繼ぎ合した鮑の皮が纏はれてゐた。

卑彌呼は兵士達に押し込められたまゝ、乾草の上へ顔を伏せて倒れてゐた。夜は更けた。兵士達のさざめく聲は、彼らの疲勞と睡けのために耶馬臺の宮から鎮まつた。さうして、森からは霧を透して梟と狐の聲が石窖の中へ聞えて來た。曾て、卑彌呼が森の中で卑狗の大兄の腕に抱かれて梟の聲を真似たのは、過ぎた平和な日の一夜であつた。曾て、彼女が訶和郎の腕の中で狐の聲を聞いたのは、過ぎた數日前の夜であつた。

「あゝ、訶和郎よ、もし我が爾に従つて不彌へ廻れば、我は今爾とともにゐるのであらう。あゝ、訶和郎よ、我を赦せ。我は卑狗を愛してゐる。爾は我のために傷ついた。」

卑彌呼は頭を上げて格子の外を見た。外では、弓を首によせかけた奴隸が、消えかかつた篝火の傍で乾草の上に両手をついて、石窖の中を覗いてゐた。彼女は格子の傍へ近か寄つ

た。そして、奴隸の臆病な犬のやうな二つの細い眼に嫣然と微笑を投げて、彼に云つた。

「來れ。」

奴隸は眼脂に塊つた逆睫をしばたゝくと、大きく口を開いて背を延ばした。弓は彼の肩から迂り落ちた。

「爾は鹿狩りの夜を見たか。」

「見た。」

「爾は我の横に立てる男を見たか。」

「見た。」

卑彌呼は首から勾玉を脱すと、彼の膝の上へ投げて云つた。

「爾は彼を見た山へ行け。爾は彼を伴なへ。爾は玉をかけて山へ行け。我は爾にその玉を與へよう。」

奴隸は彼女の勾玉を拾つて首へかけた。勾玉は彼の胸の上で、青い蜥蜴の刺青を叩いて音を立てた。彼は加はつた胸の重みを愛玩するかのやうに、ひとり微笑を洩し乍ら玉を撫でた。

「夜は間もなく明けるであらう、行け。」と卑彌呼は云つた。

奴隸は立ち上つた。さうして、胸を壓へると彼の姿は夜霧の中に消えていつた。しかし、間もなく、彼の足音に代つて石を打つ木靴の音が聞えて來た。卑彌呼は再び格子の外を見ると、そこには霧の中にひとり王の反耶が立つてゐた。

「不彌の女、爾は何故に眠らぬか、我は耶馬臺の國王の反耶である。」と君長は卑彌呼に云つた。

「王よ、耶馬臺の石窖は我の宮ではない。」

「爾に石窖を與へた者は我ではない。石窖は旅人の宿、もし爾を傷つけるなら、我は我の部屋を爾のために與へよう。」

「王よ、爾は何故に我が傍に我の夫を置くことを赦さぬか。」

「爾と爾の夫とを裂いた者は我ではない。」

「爾は我の夫を呼べ。夜が明ければ、我は不彌へ歸るであらう。」

「爾の行く日に我は爾に馬を與へよう。爾は爾の好む日まで耶馬臺の宮にゐよ。」

「王よ、爾は何故に我の滞ることを欲するか。」

「一日滞る爾の姿は、一日耶馬臺の宮を美しくするであらう。」

「王よ、我の夫を呼べ。我は彼とともに滞まらう。」

「夜が明ければ、我は爾に爾の夫と、部屋とを與へよう。」

反耶の木靴の音は暫く格子の前で廻つてゐた。さうして、彼の姿は夜霧の中へ消えていつた。洞内の一隅ではひとすぢの水の滴りが靜かに岩を叩いてゐた。

十六

反繪は鹿狩りの疲勞と酒とのために、計畫してゐた卑彌呼の傍へ行く可き時を寢過した。さうして、彼が眼醒めたときは、耶馬臺の宮は、朝日を含んだ金色の霧の底に沈んでゐた。彼は松明の炭を踏みながら、霧を浮かべた園の中で、堤のやうに積み上げられた鹿の死骸の中を通つていつた。彼の眠りの足らぬ足は、鹿の堤から流れ出てゐる血の上で這つた。遠くの麻の葉叢の上を、野牛の群れが黒い脊だけを見せて森の方へ動いていつた。するとその最後の牛の脊が、遽に歩を早めて馳け出したとき、刺青のために青まつた一人の奴隸の半身が、赤く血に染つた一人の身體を脊負つて、だん／＼と麻の葉叢の上に高まつて來た。さうして、反繪が園を斜めに横切つて、卑彌呼の石窖を眺めて立つた時、奴隸の蜥蜴は一層曲りながら、石窖へ通る岩の上を歩いていつた。奴隸を睥んだ反繪の片眼は強く反りを打つた鼻柱の横で輝いた。

「あゝ、訶和郎よ。」と石窖の中から卑彌呼の聲が聞えて來た。

奴隸は脊負つた赤い死體の胸を石窖の格子に立てかけて、倒れぬ様に死體の背を押しつけた。格子の隙から卑彌呼の白い兩手が延び出ると、垂れた訶和郎の首を立て直して云つた。

「あゝ、爾は死んだ。爾は復讐を残して死んだ。爾は我のために殺された。」

奴隸は死體の脊から手を放した。彼は歡喜の微笑をもらしながら、首の勾玉を兩手で揉んだ。訶和郎の死體は格子を撫でて地に倒れた。

反繪は毛の生えた逞しいその瞞で霧を搖るがしながら石窖の前へ馳けて來た。

訶和郎を抱き上げようとして身を蹲めた奴隸は、足音を聞いて背後を向くと、反繪の唇からむき出た白い齒竝が怒氣を含んで迫つて來た。奴隸は吹かれたやうに一飛び横へ飛びのいた。

「女は吾に玉を與へた。玉は我の玉である。」

彼は胸の勾玉を壓へ乍ら、櫟と檜の間に張り詰つた蜘蛛の網を突き破つて森の中へ馳け込んだ。

反繪は石窖の前まで來ると格子を握つて中を覗いた。

卑彌呼は格子に區切られたまゝ倒れた訶和郎の前に坐つてゐた。

「旅の女よ。」と反繪は云つてその額を格子につけた。

卑彌呼は訶和郎を指差しながら、反繪を睥んで云つた。

「爾の獲物はこれである。」

「やめよ。我は爾と共に山を下つた。」

「爾の矢は我の夫の胸に刺さつてゐる。」

「我は爾の傍に従つてゐた。」

「爾の弓弦は爾の手に従つた。」

「爾の夫を狙つた者は奴隸である。」

「奴隸は吾に従つた。」

反繪は奴隸の置き忘れた弓と矢を拾ふと、破れた蜘蛛の巢を潜つて森の中へ馳け込んだ。しかし、彼の片眼に映つたものは、霧の中に包まれた老杉と踏み蹂られた羊齒の一條の路とであつた。彼はその路を辿りながら森の奥深く進んでいつた。しかし、彼の片眼に映つたものは、茂みの隙間から射し込んだ朝日の縞を切つて飛び立つ雉子と、霧の底でうごめく野牛の臍ろに黒い背であつた。さうして、露はたゞ反繪の堅い角髪を打つた。が、路は

一本の太い樫かしの木の前で止つてゐた。彼は立ち停つて森の中を見廻した。頭の上から露の滴りが一層激しく落ちて來た。反繪はふと上を仰ぐと、樫の梢の股の間に、奴隷の蜥蜴の刺青が青い瘤のやうに見えてゐた。反繪は蜥蜴を狙つて矢を引いた。すると、奴隷の身體は圓くなつて枝にあたりながら、熟した果實のやうに落ちて來た。反繪は、舌を出して俯伏せに倒れてゐる奴隷の方へ近よつた。その時、奴隷の頭髮からはづれか、つた一連の勾玉が、へし折れた羊齒の青い葉の上で、露に濡れて光つてゐるのが眼についた。彼はそれをはづして自分の首へかけ垂らした。

十七

霧はだん／＼と薄らいで來た。さうして、森や草叢の木立の姿が、朝日の底から鮮かに浮き出して來るに従つて、煙の立ち昇る篠屋からは木を打つ音やさざめく人聲が聞えて來た。しかし、石窖の中では、卑彌呼は、格子を隔て、倒れてゐる訶和郎の姿を見詰めてゐた。數日の間に第一の良人を刺され、第二の良人を撃たれた彼女の悲しみは、最早や彼女の涙を誘はなかつた。彼女は乾草の上へ倒れては起き上り、起きては眼の前の訶和郎の死體を眺めてみた。しかし、角髪を解いて血に染つてゐる訶和郎の姿は依然、格子の外に

倒れてゐた。さうして、再び彼女は倒れると、胸に劍を刺された卑狗の姿が、乾草の匂ひの中から滲んで來た。彼女はただ茫然として輝く空にだん／＼と溶け込む霧の世界を見詰めてゐた。すると、今迄彼女の胸に溢れてゐた悲しみは、突然憤怒となつて爆發した。それは地上の特權であつた暴虐な男性の腕力に刃向ふ彼女の反逆であり怨恨であつた。彼女の眼は次第に激しく波動する兩肩の起伏につれて、益々冷たく空の一點に食ひ入つた。ふとその時、草叢の葉波が描いた地平の上から立昇つてゐる一條の煙が彼女の眼の一角に映り始めた。それは薄れゆく霧を突き破つて眞直ぐに立ち昇り、渦巻きながら圓を開いて擴げた翼のやうにだん／＼と空を領してゐる煙であつた。彼女は立ち上つた。さうして、格子を攔むと高らかに煙に向つて呼びかけた。

「あゝ、大神は吾の手に觸れた。吾は大空に昇るであらう。地上の王よ。我れを見よ。我は爾らの上に日輪の如く輝くであらう。」

石窖の格子の隙から現れた卑彌呼の微笑の中には、最早や、卑狗も訶和郎も消えてゐた。さうして、彼等に代つてその微笑の中に潜んだものは、たゞ怨恨を含めた慘忍な征服欲の光りであつた。

邪馬臺の宮の若者達は、眼を醒ますと噂に聞いた鹿の美女を見ようとして宮殿の花園へ押しよせて来た。彼らの或者は彼女に食はすがために、鹿の好む大バコや、百合根を持つてゐた。然し、彼らの誰もが鹿の美女を捜し出すことが出来なくなるに、聽て庭園に積まれた鹿の死體が彼らの手によつて崩し出された。その時、君長反耶の命を受けた一人の使部は嚴かな容姿を眞直ぐに前方へ向けながら、彼らの傍を通り抜けて石窖の方へ下つていつた。若者達の幾らかは直ちに彼の後から従つた。使部は石窖の前まで来るにその門をこり脱し、櫓の格子を上を開いて跪拜した。

「王は爾を待つてゐる。」

間もなく若者達は、暗い石窖の中から現れた卑彌呼の姿を見るに、齊しく足を停めて首を延ばした。彼女は入口に倒れてゐる訶和郎を抱き上げるにそこから動かうもしなかつた。

「王は爾を待つてゐる。」と、再び使部は彼女に云つた。

卑彌呼は訶和郎の胸から顔を上げて使部を見た。

「爾は王の前へ彼を伴なへ。」

「王は爾を伴へし我に云つた。」

「王は彼を伴ふを我に赦した。連れよ。」

使部は訶和郎の死體を脊に負つて引き返した。卑彌呼は亂れた髪と衣に、乾草の屑をたからせて使部の後から石の坂道を登つていつた。若者達は左右に路を開いて彼女の顔を覗いてゐた。さうして、彼女の姿が彼らの前を通り抜けて、高い麻の葉波の中に消えやうとしたとき、初めて彼らの曲つた腰は靜に彼女の方へ動き出した。彼らの肩は狭い路の上で突き衝つた。が、百合根を持つた一人の若者は後の方で口を開いた。

「鹿の美女は森にゐる。森へ行け。」

若者達は再び彼の方を振り向くに、石窖の前から彼に従つて森の中へ馳け込んだ。

卑彌呼の足音が高縁の板をきしめて響いて来た。君長の反耶は、竹の遣戸を童男に開かせた。薄紅に染つた萩の花壇の上には、霧の中で數羽の鶴が舞つてゐた。さうして、朝日を背負つた一つの峰は、花壇の上で絶えず紫色の煙を吐いてゐた。

やがて、卑彌呼は使部の後から現れた。君長は立上つて彼女に云つた。

「旅の女よ。爾は爾の好む部屋へ行け。我は爾のためにその部屋を飾るであらう。」

「王よ。」使部は跪拜いた膝の上へ訶和郎を乗せて云つた。「吾は女の言葉に従つて若い死體を伴なふた。」

「旅の女よ。爾の衣は鹿の血のために穢れてゐる。爾は新らしき耶馬臺の衣を手に通せ。」

「王よ。若い死體は石窖の前に倒れてゐた。」

「捨てよ、爾に命じたものは死體ではない。」

「王よ、若い死體は吾の夫の死體である。」と卑彌呼は云つた。

反耶の赤い唇は微動しながら喜びの皺をその両端に深めていつた。

「あ、爾は吾のために爾の夫を死體になした。着よ、吾の爾に與へたる衣は吾の心のやうに整うてゐる。」

王は隅にひかへてゐた一人の童男を振り返つた。童男は両手に桃色の絹を捧げたまゝ、卑彌呼の前へ進んで來た。

「王よ。」と使部は訶和郎を抱き上げて云つた。「若い死體を何處へ置くか。」

「旅の女よ、爾は爾の夫を何處へ置くか。」

その時、急に高縁の踏板が、馳け寄る荒々しい響を立て、振動した、人々は入口の空間に眼を向けるに、そこへ怒つた反繪が馳け込んで來た。

「兄よ、旅の女が逃げ失せた。石窖の口が開いてゐた。」

「王よ。我は夫の死體を欲する者に與へるであらう。」と卑彌呼は云つた。さうして、使部の膝から訶和郎の死體を抱きこるに、入口に立ち塞つた反繪の胸へ押しつけた。

反繪は崩れた訶和郎の角髪を除けるに片眼を出して彼女に云つた。

「吾は爾に代つて奴隸を撃つた。爾の夫を射殺した奴隸を撃つた。」

「やめよ。夫の死體を欲した者は爾である。」と、卑彌呼は云つた。

「旅の女よ、森へ行け、奴隸の胸には我の矢が刺さつてゐる。」

卑彌呼は反繪の片眼の方へ背を向けた。さうして、腰を縛つた古い衣の紐を取り、その脇に廻つた結び目を解きほどくに、彼女の衣は、葉を取られた桃のやうな裸體を浮かべて、彼女の滑かな肩から毛皮の上へ這り落ちた。

反耶の大きく開かれた二つの眼には、童男の捧げた衣の方へ、靜かに動く圓い彼女の腰の曲線が、霧を透した朝日の光りを區切つたために、七色の虹になつて浮き立ち乍ら花壇の上で羽叩く鶴の胸毛をだん／＼にその横から現してゆくのが映つてゐた。さうして、反

繪の動かぬ一つの眼には、彼女の乳房の高まりが、反耶の銅の劍に戯れる鳩の頭のやうに微動するのが映つてゐた。卑彌呼は裸體を巻き變へた新しい衣の一端で、童男の捧げた指先を拂ひながら部屋の中を見廻した。

「王よ。此の部屋を吾に與へよ。吾は此處に停まらう。」

彼女は靜に反耶の傍へ近寄つた。さうして、背に廻らうとする衣の二つの端を王に示しながら、彼の胸へ身を寄せかけて微笑を投げた。

「王よ、吾は邪馬臺の衣を好む。爾は吾のために爾の與へた衣を結べ。」

反耶は卑彌呼を見詰めながら、其衣の端を手にこつた。悦びに聲を潜めた彼の顔は、髯の中で彼女の衣の射る絹の光を受けて薄紅に榮えてゐた。部屋の中で訶和郎の死體が反繪の腕を這つて倒れる音がした。反繪の指は垂下つた兩手の先で、頭を擡げる十疋の蠶の様に動き出す、彼の身體は胸毛に荒々しい呼吸を示しながら次第に卑彌呼の方へ傾いていつた。

反耶は衣を結んだ兩手を後から卑彌呼の肩へ廻さうとした。こゝ、彼女は急に妖艶な微笑を兩頬に搖るがしながら、彼の腕の中から身を翻して踊り出した。さうして、今や卑彌呼を目がけて飛びか、らうこしてゐる反繪の方へ馳け寄るこゝ、彼の剛い首へ兩手を卷いた。

「あゝ、爾は我のために我の夫を撃ちこめた。我を我の好む邪馬臺の宮にこゝめしめた者

は爾である。」

「旅の女よ。我は爾の夫を撃つた。我は爾の勾玉を奪つた奴隸を撃つた。我は爾を傷つける何者をも撃つであらう。」

反繪の太い眉毛は潰れた臉を吊り上げて柔和な形を描いて來た。しかし反耶の空虚に擴がつた兩腕は次第に下へ垂れ落るこゝ、反耶は劍を握つて床を突きながら使部に云つた。

「若い死體を外へ出せ。宿禰を連れよ。鹿の死體の皮を剥げ、彼に云へ。」

使部は床の上から訶和郎の死體を抱き上げようとした。卑彌呼は反繪の胸から放れるこゝ、急に使部から訶和郎を抱きこつて毛皮の上へ泣き崩れた。

「あゝ、訶和郎、爾は不彌へ歸れ、我に云つた。我は邪馬臺の宮にこゝまつた。さうしてあゝ、爾は我のために殺された。」

反繪は首から奴隸の勾玉を取りはずして卑彌呼の傍へ近寄つて來た。

「旅の女よ。我は奴隸の奪つた勾玉を爾に返す。」

「旅の女よ。立て。吾は爾の夫を阿久那の山へ葬らう。」こゝ使部は云つて訶和郎の死體を抱きこつた。

「王よ。我を不彌へ返せ、爾の馬を我に與へよ。我は不彌の山へ我の夫を葬らう。」

「爾の夫は死體である。」

「朝が来た、爾が我を不彌へ歸すを約したのは夕べである。馬を與へよ。」

「何故に爾は歸る。」

「爾は何故に我をこめるか。」

「我は爾を欲す。」

卑彌呼の顔は再び生々とした微笑のために輝き出した。さうして、彼女は反耶の肩に兩手をかけるに彼に云つた。

「あゝ、吾を爾の宮にとゞめよ、吾の夫は死體である。」

「旅の女、吾は爾を欲す。」
反繪は云つて彼女の方へ迫つて来た。

卑彌呼は反耶に與へた顔の微笑を再び反繪に向けるに彼に云つた。

「我は不彌へ歸らず。吾は爾らと共に耶馬臺の宮にこゞまるであらう。爾は吾のために、我に眠りを與へよ。王に願へ。我は數夜の眠りを馬の上に眠つてゐた。」

「兄よ。此の部屋を去れ。」
反繪は云つた。

「爾の獲物は死體である。爾は獲物を持つて部屋を去れ。」
反耶は云つた。

卑彌呼は二人に挟まれながら反耶の肩を柔く入口の方へ押して云つた。

「王よ。我に眠りを與へよ。眼が醒めなば我は爾を呼ぶであらう。」

「不彌の女、吾も呼べ。兄が爾を愛するよりも我は爾を愛す。」

反繪は肩を立て、王を睨むに部屋の外へ出て行つた。

「女よ眠れ、爾の眼が醒めなば、吾は爾のために此の部屋を飾らさう。」

反耶の卑彌呼に囁いた聲に交つて、部屋の外からは、高く反繪の銅鑼のやうな聲が響いて来た。

「兄よ、部屋を出よ。我は爾よりも先に出た。不彌の女よ、兄を出せ。」

反耶は眉間に皺を落して入口の方へ歩いて行つた。童男は彼の後から従つた。使部は最後に訶和郎の死體を抱いて出やうとするに、卑彌呼は彼の腕から訶和郎を奪つて荒々しく竹の遣戸を後から閉めた。

「あゝ、訶和郎、吾を赦せ。吾は爾の復讐をするであらう。」

彼女は床の上へ坐つて、齒を咬みしめた訶和郎の顔に自分の頬をすり寄せた。しかし、その冷い死體の觸感は、聽て卑彌呼の大兄の頬になつて彼女の頬に傳はつた。彼女の顔は流れる涙のために光つて来た。

「あゝ、大兄よ。爾は爾の腕の中に我を雌雉子の如く抱きしめた。爾は吾を吾が爾を愛す

るごごく愛してゐた。あゝ大兄、爾は何處へ行つた。返れ。」

彼女は両手で頭をかゝへるこ立ち上つた。

「大兄、大兄、我は爾の復讐をするであらう。」

彼女はよろめきながら部屋の中を歩き出した。脱ぎ捨てた彼女の古い衣は彼女の片足に纏りついた。さうして、彼女の足が厚い御席みましの繼ぎ目に入るこ、彼女は足をこられてこつこ倒れた。

二十

反繪は閉された卑彌呼の部屋の前に、番犬のやうに噂んでゐた。前方の廣場では、兵士達が歌ひ乍ら鹿の毛皮を剥いでゐた。彼らの劍は猥褻なかけ聲と一緒に鹿の腹部に突き刺さるこ、忽ち鹿は三人からなる一組の兵士の手によつて裸體にされた。間もなく今まで積まれてあつた鹿の小山の褐色の色が、麻の葉叢の上からだんだんに滅つてくるこ、それにひきかへて、珊瑚色の鹿の小山が新しく晴れ渡つた空の中に高まつてきた。手の休まつた兵士達は、血の流れた草の上で角力をこつた。神庫の裏の篠屋では、狩獵を終つた饗宴の準備のために、速成の鹿の漬物が作られてゐた。兵士達は廣場から運んだ裸體の鹿を、

地中に埋まつた大甕の中へ鹽塊と一緒に投げ込むこ彼らはその上で枯葉を焚いた。その横では、不足な酒を作るがために、兵士達は森から摘みこつてきた黒松葉を壓搾して汁を作つてゐた。こゝでは、その仕事の効果が最も直接に彼ら自身の口を喜ばすがために、歌ふ彼らの聲も、いづれの仲間達の歌より一段こ威勢があつた。

反繪は時々戸の隙間から中を覗いた。薄暗い部屋の中からは、一條の寢息が絶えず幽かに聞えてゐた。彼は顔を顰めて部屋の前を往き來した。しかし、兵士達の廣場でさゞめく聲が一層賑はしくなつてくるこ、彼は高い欄干から飛び下りてその方へ馳けて行つた。今や麻の草場の中では、角力の一團が最も人々を集めてゐた。反繪は彼らの中へ割り込むこ今まで勝ち續けてゐた一人の兵士の前に突きたつた。

「來れ。」こ彼は叫んでその兵士の股へ片手をかけた。兵士の體軀は、反繪の胸の上で足を跳ね乍ら浮き上つた。こ、反繪は彼の身體を倒れた草の上へ投げて大手を上げた。

「我を倒した者に劍をやらう。來れ。」

その時反繪の眼には、白鷺の羽根束を擁へた反耶の二人の使部が、積まれた裸體の鹿の間を通つて卑彌呼の部屋の方へ歩いて行くのが見えた。反繪の擴げた両手は、だんだんこ下へ下つた。

「よし、我は爾に勝たう。」と一人が云つた。それは反繪に倒された兵士の眞油であつた。彼は立ち上るに、血のついた角髪で反繪の腹をめがけて突進した。

「放せ、放せ。」と反繪は云つた。が、彼の身體は曲つた眞油の脊の上で舟のやうに反つてゐたに、次の瞬間、彼は踏み蹂られた草の縁が眼につくに、反耶に微笑む不彌の女の顔を浮べて逆様に墜落した。

「我に劍を與へよ。我は勝つた、我は爾に勝つた。」

ひこり空の中で喜ぶ眞油の顔が高く笑つた。反繪は怒りのバネに跳ね起されるに、波立つ眞油の腹を蹴り上げた。眞油は叫びを上げて顛倒した。それと同時に、反繪は卑彌呼の部屋の方を振り返るに、遣戸の中へ消えようとしてゐる使部の黄色い背中が、動揺めく兵士達の頭の上から見えてゐた。

「眞油は死んだ。」

「眞油は蹴られた。」

「眞油の腹は破れてゐる。」

廣場では兵士達の歌がやまつた。あちらこちらの草叢の中から兵士達は動かぬ眞油を中心に馳け寄つて來た。しかし、反繪は彼らとは反對に廣場の外へ、鹿の死體を飛び越え、

馳け寄る兵士達を突き飛ばし、麻の葉叢の中を一文字に使部達の方へ突進した。

遣戸の中では、卑彌呼の眠りに氣使ひながら、二人の使部は、白鷺の尾羽根を周圍の壁となつた圓木の際に刺してゐた。

反繪は部屋の中へ飛び込むに、一人の使部の首を攫んで床の上へ投げつけた。使部の腕からはかゝへた白鷺の尾羽根が飛び散つた。

「我を赦せ。王は部屋を飾れと吾に命じた。」轉り乍ら叫ぶ使部の上で、白鷺の羽毛が、叩かれた花園の花弁のやうにひらひらと舞つてゐた。反繪は拳を振り乍ら使部の腰を蹴つて叫んだ。

「部屋を出よ、部屋を出よ、部屋を出よ。」

二人の使部は直ちに遣戸の方へ逃げ出した。その時彼らに代つて、兩手に龍膽と萩をか、へた他の二人の使部が這入つて來た。反繪は二人の傍へ近寄つた。そうして、その一人の腕から萩の一束を奪ひ取るに、彼の額を打ち續けてまた叫んだ。

「部屋を出よ、部屋を出よ、部屋を出よ。」

「大兄、我は王の言葉に従つた。」

「去れ。」

「大兄、我は王のために鞭打たれるであらう。」
「行け。」

二人の使部は出て行つた。が、彼らに續いてまた直ぐに二人の使部が、鹿の角を肩に背負つて這入つて來た。反繪は散亂した羽毛と萩の花の中に突き立つて卑彌呼の寝顔を眺めてゐた。彼は物音を聞きつけて振り返るに、床へ投げ出された鹿の角の一枝を、肩にひっかけたまゝ、逃げる使部の姿が、遣戸の方へ馳けて行くのが眼についた。反繪は捨てられた白鷺の尾羽根と龍膽の花束を拾ふに、使部達に代つて圓木の際に刺していつた。彼は時手を休めて卑彌呼の顔を眺めてみた。しかし、その度に、細く眼を見開いて彼の後姿を眺めてゐた卑彌呼の臉は、再び眠りのさまを装つた。

「不彌の女。」と反繪はその野蠻な顔に媚びの微笑を浮べて彼女を呼んだ。

「不彌の女。見よ、我は爾の部屋を飾つてゐる。不彌の女。起きよ。我は爾の部屋を飾つてゐる。」

卑彌呼の眠りは續いてゐた。さうして、反繪のこり残された媚の微笑は、ひこりだんだんと淋しい影の中へ消えていつた。彼は卑彌呼の頭の傍へ近寄つて片膝つくに、兩手で彼女の蒼白い頬を撫てみた。彼の胸は迫る呼吸のために次第に波動を高めて來るに彼の手に

たかつてゐた一片の萩の花瓣も、手の甲と一緒に彼女の頬の上で慄へてゐた。

「不彌の女。不彌の女。」と彼は呼んだ。が、彼の胸の高まりは突然に性の衝動となりて變化した、彼の赤い唇はひらいて來た。彼の片眼は蒼みを帯びて光つて來た。さうして、彼女の頬を撫てゐた兩でが動きこまるに、彼の體軀は漸次に卑彌呼の胸の方へ延びて來た。しかし、その時、怨恨を含んだ齒を現して、鹿の毛皮から彼の方を眺めてゐる訶和郎の死體の顔が眼についた。反繪の慾情に燃えた片眼は、忽ち恐怖の光を發して擴がつた。が、次の瞬間、挑みかゝる激情の光に急變するに、彼は立ち上つて訶和郎の死體を毛皮のままに抱きかゝへた。彼は荒々しく遣戸の外へ出ていつた。さうして、廣場を横切り、森を斜めに切つて、急に開けた斷崖の傍まで來るに、抱へた訶和郎の死體をその上から投げ込んだ。訶和郎の死體は、眼下に潜んだ縹緲とした森林の波頭の上で、數回の大圓を描きながら、太陽の光にきらきらと輝きつゝ、沈黙した緑の中へ落下した。

二十一

夜が深まるに、再び濃霧が森林や谷間から狩獵の後の饗宴に浮れてゐる邪馬臺の宮へ押し寄せて來た。場庭の草園では、霧の中で焚火が火の子を爆いて燃えてゐた。その周圍で

宮の婦女達は、赤き青きの虎斑に染つた衣を卷いて、若い男に圍まれながら踊つてゐた。踊り疲れた若者達は、尙も歌ひながら草叢の中に竝んだ酒甕の傍へ集つて來た。彼らの中の或者達は、夫々自分の愛する女の手をこつて、焚火の光りのこゝかぬ森の中へ消えていつた。王の反耶は大夫達の歡心に強ひられた酒のために、だんだんこゝかぬ森の中へ消えていつた。こゝは卑彌呼の部屋の裝飾を命じた五人の使部に、王命の違反者として體刑を宣告した。五人の使部は、武装した兵士達の圍みの中で、王の口から體刑停止の命令の下るまで鞭打たれた。彼らの脊中の上で、竹の根鞭の鳴るのこゝもに、酒樂の歌は草園の焚火の傍でますます亂雜に高まつた。さうして、遠い國境の一つの峰から立ち昇つてゐる噴火の柱は、霧の深むにつれて次第にその色を鈍い銅色に變へて來るこゝ、違反者の脊中は破れ始めて血が流れた。彼らは地にひれ伏して草を引き折りながら悲鳴を上げた。反耶は悶轉する彼らを見るこゝ、卑彌呼にその體刑を見せんがために彼女の部屋の方へ歩いていつた。何ぜなら、もし彼女が邪馬臺の宮にゐなかつたなら、反耶にこつてこの體刑は無用であつたから。しかし、反耶が卑彌呼の部屋の遣戸を押したとき、毛皮を身に纏つて横はつてゐる不彌の女の傍に、一人の男が蹲んでゐた。それは彼の弟の反繪であつた。

「不彌の女、我共來れ。我は爾のために我の命に反いた使部を罰してゐる。吾は彼ら

に爾の部屋を飾れし命じた。」

「彼らを赦せ。」こゝ卑彌呼は云つて身を起した。

「反繪、爾は此の部屋を出でよ、酒宴の踊りは彼方である。」こゝ反耶は云つて反繪の方を振り向いた。

「兄よ、爾の後は爾共に見んこして待つてゐた。」

「不彌の女、來れ。吾は爾を呼びに來た。爾の部屋を飾り忘れた使部の背中は、鞭のために破れて來た。」

「彼らを赦せ。」こゝ卑彌呼は云つた。

「よし、我は兄に代つて彼らを赦すであらう。」こゝ反繪は云つて遣戸の方へ出ようとするこゝ、反耶は彼の前へ立ち塞つた。

「待て、彼らを罰したのは吾である。」

反繪は兄の手を拂つて遣戸の方へ行きかけた。反耶は卑彌呼の傍へ近寄つた。さうして彼女の腕に手をかけるこゝ彼女に云つた。

「不彌の女よ。酒宴の準備は整ふた。爾は吾共酒宴に出よ。」

「兄よ。不彌の女共行くものは我である。」こゝ反繪は云つて遣戸の傍から反耶の方を振り

返つた。

「行け、使部の罪を赦すのは爾である。」

「不彌の女、我と共に酒宴に出よ。」反繪は再び卑彌呼の傍へ戻つて來た。

「王よ、我を酒宴に伴ふことをやめよ。爾は我と共に我の部屋にこゝまれ。」

卑彌呼は反耶の手を取つてその傍に坐らせた。

「不彌の女、不彌の女。」

反繪は卑彌呼を睨んで慄へてゐた。「爾は我と共に部屋を出よ。」

彼は彼女の腕を掴むに部屋の外へ出ようとした。

反耶は立上つて曳かれる彼女の手を持つて引きこめた。

「不彌の女、行くことをやめよ。我と共にゐよ。我は爾の傍に残るであらう。」

反繪は反耶の胸へ飛びかゝらうとした。そのとき、卑彌呼は傾く反繪の體軀をその柔き掌で制しながら君長に云つた。

「王よ、使部の傍へ吾を伴へ、我は彼らを赦すであらう。」

彼女は一人先に立つて遣戸の外へ出て行つた。反繪と反耶は彼女の後から馳け出した。しかし、彼らが庭園の傍まで來かゝつたとき、五人の使部は、最早や死體になつて土に咬

みついたまま横たはつてゐた。兵士達は王の姿を見るに、打ち疲れた腕に一段ミ力を籠めて、再び意氣揚々としてその死體に鞭を振り上げた。

「鞭を止めよ。」と、反耶は云つた。

「王よ、使部は死んでゐる。」と一人の兵士は彼に云つた。卑彌呼は振り向いて反繪の胸を指差した。

「彼らを殺した者は爾である。」

反繪は言葉を失つた啞者のやうに、たゞその口を動かし乍ら卑彌呼の顔を見守つてゐた。「來れ。」

と反耶は卑彌呼に云つた。さうして、卑彌呼の手を握るに、彼は彼女を酒宴の廣間の方へ導いていつた。

「待て、不彌の女、待て。」と反繪は叫びながら二人の後を追ひかけた。

二十二

卑彌呼は竹皮を編んで敷きつめた酒宴の廣間へ通された。松明の光に照された緑の柏の葉の上には、山椒の汁で洗はれた山蛤、山蟹、生薑、鯉、酸漿、まだ色づかぬ獼猴

桃の實くだものが竝んでゐた。さうして、蓋のこられた行器の中には、新鮮な杉菜しんせいなに抱かれた鹿や猪の肉の香物が高々盛られてあつた。その傍の素焼の大きな酒瓮じゆいの中では、和楷わがい製の諸白酒が高い香を松明の光の中に漂はせてゐた。最早や酔の廻つた好色の一人の宿禰しゆみは、再び座についた王の後で、侍女の乳房の重みを計り乍ら笑つてゐた。卑彌呼は盃をこりあげた王に、柄杓をもつて酒を注がうとするこゝ、そこへ荒々しく馳けて來たのは反繪であつた。彼は王の盃を奪ひこるこゝ卑彌呼に云つた。

「不彌の女、使部を殺した者は兄である。爾は吾に酒を與へよ。」

「待て、王は爾の兄である。盃を王に返せ。」こゝ卑彌呼は云つて、彼女は差し出してゐる反繪の手から、柔にその盃を取り戻した。「王よ、我を邪馬臺にこゝめた者は爾である。今日より爾は爾の傍に我を置くか。」

「あゝ、不彌の女。」こゝ反耶は云つて、彼女の方へ手を延ばした。

「王よ、爾は不彌の國の王女を見たか。」

「盃を吾に與へよ。」

「王よ、我は不彌の國の王女である。我の玉を爾は受けよ。」

卑彌呼は首から勾玉をこり脱すこゝ、瞠あは若わこして彼女の顔を眺めてゐる反耶の首に垂れ下

げた。

「王よ。我は我の夫こゝ奴國の國を廻つて來た。奴國の王子は不彌の國を亡した。爾は我を愛するか。我は不彌の王女卑彌呼こゝ云ふ。」

「あゝ、卑彌呼、我は爾を愛す。」

「爾は奴國を愛するか。」

「我は爾の國を愛す。」

「あゝ、爾は不彌の國を愛するか。もし爾が不彌の國を愛すれば、我に邪馬臺の兵を借せ。奴國は不彌の國の敵である。我の父こゝ母こゝは奴國の王子に殺された。我の國は亡びである。爾は我のために、奴國を攻めよ。」

「卑彌呼。」こゝ横から反繪は云つた。さうして、突き立つたまゝ彼女の前へその顔を近づけた。「我は奴國を攻める。我は兄が爾を愛するよりも爾を愛す。」

「あゝ、爾は我のために奴國を撃つか。坐れ、我は爾に酒を與へよう。」

卑彌呼は王に向けてゐたにこやかな微笑を急に反繪に向けるこゝ、その手をこつて坐らせた。反耶の顔は、喜びに輝き出した反繪の顔にひきかへて顰しりぞんで來た。

「卑彌呼、邪馬臺の兵は、吾の兵である。反繪は我の一人の兵である。」こゝ反耶は云つた。

反繪の顔は勃然として朱を浮べるに、彼の拳は反耶の角髪を打つて鳴つてゐた。反耶は頭をかゝへて倒れながら宿禰を呼んだ。

「反繪を縛れ。宿禰、反繪を殺せ。」

併し、一座の者は酔つてゐた。反繪は尙も反耶の上に飛びかゝらうとして片膝を立てたとき、卑彌呼は反耶と反繪の間へ割り込んで、倒れた反耶をひき起した。反耶は手に持った酒盃を反繪の額へ投げつけた。

「去れ。去れ。」

反繪は再び反耶の方へ飛びかゝらうとした。卑彌呼は彼の怒つた肩に手をかけた。さうして、轉つてゐる酒盃を彼の手に握らせて彼女は云つた。

「やめよ、爾は吾の酒盃をこれ。吾に邪馬臺の歌をきかしめよ。吾は不彌の歌を爾のために歌ふであらう。」

「卑彌呼。吾は邪馬臺の兵を動かすであらう。邪馬臺の兵は、兄の命より吾の力を恐れてゐる。」

「爾の力は強きこゝ不彌の牡牛のやうである。吾は爾のこゝき強き男を見たこゝがない。」
こゝ卑彌呼は云つて反繪の酒盃に酒を注いだ。

反繪の顔は、太陽の光りを受けた童顔のやうに柔ぐに、彼は酒盃から酒を滴らしながら勢ひよく飲み干した。しかし、卑彌呼は、彼女の傍で反繪を睨みながら唇を噛み締めてゐる反耶の顔を見た。彼女は再び柄杓の酒を傍の酒盃に満して彼の方へ差し出した。さうして、彼女は左右の二人の酒盃の干される度に、にこやかな微笑を配りながらその柄杓を廻していつた。間もなく、反繪の片眼は赤銅のやうな顔の中で、一つ朦朧と濁つて來た。さうして、王の顔は溢りながら眠りに落ちる犬のやうに傾き始めるに、聽て彼は卑彌呼の膝の上へ首を垂れた。卑彌呼は今はまだ、反繪の眠入るのを待つてゐた。反繪は行器の中から鹿の肉塊を攫み出すに、それを両手で振り廻して唄を歌つた。卑彌呼は彼の手をこつて膝の上へ引き寄せた。

外の草園では焚火の光りが薄れて來た。草叢のあちこちからは醉漢の呻きが漏れてゐた。さうして、次第に酒宴の騒ぎが宮殿の内外から鎮つて來るに、聽て、卑彌呼の膝を枕に轉々こしてゐた反繪も眠りに落ちた。卑彌呼は部屋の中を見廻した。しかし、一人こして彼女のますく、冴え渡つたその朗な眼を見詰めてゐる者は誰もなかつた。たゞ酒氣と鼾聲とが亂れた食器の方々から流れてゐた。彼女は鹿の肉塊を冠つて眠つてゐる反繪の顔を見詰めてゐた。今や彼女には、訶和郎のために復讐する時が來た。劍は反繪の腰に敷かれてあ

つた。さうして彼女の第二の夫を殺害した者は彼女の膝の上に眠つてゐた。しかし、反繪のその逞しい兩肩の肉塊ミ、その狂暴な力の溢れた顎ミに代つて、奴國に攻め入る者は、彼の他の何者が何處の國にあるであらう。聽て、彼のために長羅の首は落ちるであらう。聽て、彼女は不彌ミ奴國ミ邪馬臺の國の三國に君臨するであらう。さうして、もしその時が來たならば、彼女は更に三つの力を以て、久しく攻伐し合つた暴虐な諸國の王をその足下に蹂躪するさきが來るであらう。彼女の澄み渡つた瞳の底から再び浮び始めた殘虐な微笑は、静まつた夜の中をひこり毒汁のやうに流れてゐた。

「あゝ、地上の王よ、我を見よ。我は爾らの上に日輪の如く輝くであらう。」

彼女は膝の上から反繪ミ反耶の頭を降ろして、靜に彼女の部屋へ歸つて來た。しかし、彼女はひこりになるミ、またも毎夜のやうに、幻の中で卑狗の大兄の匂を嗅いだ。彼は彼女を見詰めて微笑むミ、立ちすくむ小鳥のやうな彼女の傍へ大手を擴げて近寄つて來た。

「卑彌呼。卑彌呼。」

彼女は卑狗の囁き乍ら、卑狗の波打つ胸の力を感じるミ、崩れる花束のやうに彼の胸の中へ身を投げた。

「あゝ、大兄、大兄、爾は何處へ行つた。」

彼女の身體は毛皮の上に倒れてゐた。しかし、その時、またも彼女の怨恨は、涙の底から急に浮び上つた仇敵の長羅に向つて猛然ミ勃發した。最早や彼女は、その胸に沸騰する狂ほしい復讐の一念を壓伏してゐるこゝが出来なくなつた。

「大兄を返せ、大兄を返せ。」

彼女は立ち上つた。さうして、きり／＼ミ齒をきしませ乍ら、圓木の隙に刺された白鷺の尾羽根を次ぎ次ぎに引き脱いては捨て、いつた。しかし、再び彼女は彼女を呼ぶ卑狗の大兄の聲を聞きつけた。彼女の身體は呆然ミ石像のやうに立ち寄り、風に吹かれた衣のやうに圓木の壁にしなだれかゝるミ、再び抜き捨てられた白鷺の尾羽根の上へこつこ倒れた。

「ああ、大兄、大兄、爾は我を残して何處へ行つた。何處へ行つた。」

二十三

反耶は夜中眼が醒めるミ、傍から不彌の女が消えてゐた。さうして、彼の見たものは自分の片手に握られた乾いた一つの酒盃ミ、肉塊を冠つて寝てゐる反繪の口を開いた顎ミであつた。

「不彌の女、不彌の女。」

彼は立ち上つて卑彌呼の部屋へ行かうとしたとき、反繪の足に蹠いて前にのめつた。しかし、彼の足は急いでゐた。彼は蹠踉めき乍ら、彼女の部屋の方へ近づくこ、その遣戸を押して中に這入つた。

「不彌の女。不彌の女。」

卑彌呼は白鷺の散亂した羽毛の上に倒れたまゝ、動かなかつた。

反耶は卑彌呼の傍へ近寄つた。さうして、片膝をつきながら彼女の背中に手をあて、囁いた。

「起きよ、不彌の女、我は爾の傍へ來た。」

卑彌呼は反耶の力に従つて靜かに仰向に返るこ、涙に濡れた頬に白い羽毛をたからせたまゝ、彼を見た。

「爾は何故に我を残してひこり去つた。」こ反耶は云つた。

卑彌呼は黙つて慾情に慄へる反耶の顔を眺め續けた。

「不彌の女。我は爾を愛す。」

反耶は唇を慄はせて卑彌呼の胸を抱きかゝへた。卑彌呼は石のやうに冷然こして耶馬臺の王に身をまかせた。

そのとき、部屋の外から重い楚音が響いて來た。さうして、彼女の部屋の遣戸が急に開くこ、そこへ現れたのは反繪であつた。彼は二人の姿を見るこ突き立つた。が、忽ち彼の下顎は狂暴な嫉妬のために戰慄した。彼は齒をむき出して無言のまゝ、猛然こ反耶の方へ迫つて來た。

「去れ。去れ。」こ反耶は云つて卑彌呼の傍から立ち上つた。

反繪は、恐怖の色を浮かべて逃げようこする反耶の身體を抱きかゝへるこ、彼を圓木の壁へ投げつけた。反耶の頭は逆様に床を叩いて轉落した。反繪は腰の劍をひき抜いた。さうして、露はな足を跳ねてゐる兄の脇腹へ突き刺した。反耶は呻きながら刺された劍を握つて立ち上らうこした。が、反繪は再び彼の胸を斬り下げた。反耶は卑彌呼の方へ腹這ふこ、彼女の片足を攫んで絶息した。しかし卑彌呼は横たはつたまゝ、身動きもせず、彼女の足を握つてゐる王の指先を眺めてゐた。反繪はまた陽に逢はぬ影のやうに青黒くなつて反耶の傍に突き立つてゐた。聽て、反繪の手から劍が落ちた。靜かな部屋の中で、床に刺つて横に倒れる劍の音が一度した。

「卑彌呼、我は兄を殺した。爾は我の妻になれ。」

反繪は卑彌呼の傍へ蹲むこ、荒い呼吸を彼女の顔に吐きかけて、彼女の腰こ肩こに手を

かけた。しかし、卑彌呼は黙然として反耶の死體を眺めてゐた。

「卑彌呼、我は奴國を攻める。我は爾を愛す、我は爾を欲す。卑彌呼、我の妻になれ。」

彼女の頬に附いてゐた白い羽毛の一端が、反繪の呼吸のために揺れてゐた。反繪は尙も腕に力を籠めて彼女の上に身を蹲めた。

「卑彌呼、卑彌呼。」

彼は彼女を呼びながら彼女の胸を抱かうとした。彼女は曲げた片腕で反繪の胸を押しつけるに靜かに云つた。

「待て。」

「爾は兄に身を與へた。」

「待て。」

「我は兄を殺した。」

「待て。」

「我は爾を欲す。」

「奴國の滅びたのは今ではない。」

反繪の顔は勃發する衝動を叩かれた苦惱のために歪んで來た。さうして、彼の片眼は、

暫時の焦燥に搖られながらも次第に獸的な快意を閃かせて卑彌呼の顔を覗き始めるに、彼女は飛び立つ鳥のやうに身を跳ねて、足元に落ちてゐた反繪の劍を拾つて身構へた。

「卑彌呼。」

「部屋を去れ。」

「我は爾を愛す。」

「奴國を攻めよ。」

「我は攻める。劍を放せ。」

「奴國の王子を長羅に云ふ。彼を撃て。」

「我は撃つ。爾は我の妻になれ。」

「長羅を撃てば、我は爾の妻になる。部屋を去れ。」

「卑彌呼。」

「去れ。奴國の滅びたのは今ではない。」

反繪は彼の片眼に怨恨を流して卑彌呼を眺めてゐた。しかし、間もなく、戦ひに疲れた獸のやうに彼は足を鈍らせて部屋の外へ出ていつた。卑彌呼は再び床の上へ俯伏せに身を崩した。彼女は彼女自身の身の穢れを思ひ浮べるに、彼女を取巻く卑狗の大兄の靈魂が今

は次第に彼女の身邊から遠のいて行くのを感じて来た。彼女の身體は恐怖と悔恨のため顛へて来た。

「あゝ、大兄、我を赦せ、我を赦せ、我のために爾は返れ。」

彼女は劍を握つたまゝ泣き伏してゐたとき、部屋の外からは、突然喜びに溢れた威勢よき反繪の聲が聞えて来た。

「卑彌呼、我は奴國を攻める。我は奴國を砂のやうに崩すであらう。」

二十四

邪馬臺の宮では、一人として王を殺害した反繪に向つて逆ふものはなかつた。何故なら、邪馬臺の宮の人々には、彼の狂暴な熱情と力とは、前から、國境に立ち昇る夜の噴火の柱と等しい恐怖となつて映つてゐたのであつたから。しかし、君長の葬禮は宮人達の手によつて、小山の頂きで行はれた。二人の宿禰と九人の大夫に代つた十一の埴輪が、王の柩と一緒に埋められた。さうして、王妃と、王の三頭の乗馬と、三人の童男とは、殉死者として首から上を空間に擡げたまゝ、その山に埋められた。貞淑な王妃を除いた他の殉死者の悲痛な叫喚は、終日終夜、秋風のみまに宮のうへを吹き流れた。さうして、次第に彼らの叫喚

が弱まるに一緒に、その下の邪馬臺の宮では、着々として戦の準備が整うていつた。先づ兵士達は周囲の森から野牛の群れを狩り集めることを命ぜられると、次に數千の投げ槍と楯と矢とを造る傍ら、弓材となる梓や檀を弓矯に懸けねばならなかつた。反繪は日々兵士達の間を馳け廻つてゐた。しかし、彼の卑彌呼を得んとする慾望はますます彼を焦燥せしめ、それに従ひ彼の狂暴も日に日にその度を強めていつた。彼は戦々競々として馳け違ひながら立ち働く兵士達の間から、暇ある度に卑彌呼の部屋へ戻つて来た。彼は彼女に迫つて訴へた。しかし、卑彌呼の手には絶えず抜かれた一本の劍が握られてゐた。さうして、彼女の答へは定つてゐた。

「待て、奴國の滅びたのは今ではない。」

反繪はその度に無言のみまゝ、戶外へ馳け出すと、必ず彼の劍は一人の兵士を傷つけた。

二十五

奴國の宮では、長羅は卑彌呼を失つて以來、一つの部屋に横たはつたまゝ起きなかつた。彼は彼女を探索に出かけた兵士達の歸りを待つた。しかし、歸つた彼らの誰も弓と矢を捨てると黙つて農夫の姿に變つてゐた。長羅は童男の運ぶ食物にも殆んど手を觸れよう

もしなくなつた。そればかりでなく、最早や彼を助ける一人残つた祭司の宿禰にさへも、彼は言葉を交へようとしなかつた。さうして、彼の長軀は、不彌を追はれて歸つたとき彼の「ごこく」、再び「矛木」のやうにだんくくと瘦せていつた。彼の病原を洞察した宿禰は、蜚蜋こ、鷄腸草こ、童女の脛水こを混ぜ合せた液汁を長羅に飲ませるために苦心した。しかし長羅はそれさへも飲まうとはしなかつた。そこで、宿禰は奴國の宮の乙女達の中から、優れた美しい乙女を選抜して、長羅の部屋へ導き入れるこを計畫した。しかし、第一日に選ばれた乙女こ次の乙女の美しさは、長羅の引き締つた唇の一端さへも動かすこが出来なかつた。宿禰は憂慮に悩んだ顔をして、自ら美しい乙女を捜し出さんがため、奴國の宮の隅々を廻り始めた。その噂を聞き傳へた奴國の宮の娘を持つた母親達は、己の娘に華やかな装ひをこらさせ、髪を飾らせて戸の外に立たせ始めた。さうして、彼女自身は己の娘を凌駕する美しい娘達を見たときには、それらの娘達の古い悪行を、通る宿禰の後から大聲で饒舌つていつた。かうして、第三に選ばれた美しい乙女は、娘を持つた奴國の宮の母親達のまだ誰もが豫想さへもしなかつた訶和郎の妹の香取であつた。しかし、己の娘の榮譽を彼女のために奪はれた母親達の誰一人こして、香取の美貌と行跡について難ずるものは見あたらなかつた。何びなら、香取の父は長羅に殺された宿禰であつたから。彼女は父の

慘死に次いで、兄の逃亡の後には、たゞ一人訶和郎の歸國するのを待つてゐた。彼女にこつて、父を殺した長羅は、彼女の心の敵こはならなかつた。彼女の敵は、彼女がひこり胸底深く秘め隠してゐた愛する王子長羅を奪つた不彌の女の卑彌呼であつた。さうして、彼女の父を殺した者も、彼女にこつては、彼女の愛する王子長羅をして彼女の父を殺さしめた不彌の女の卑彌呼であつた。選ばれた日のその翌朝、香取は宮殿から送られた牛車に乗つて登殿した。彼女は宿禰が彼女を選んだその理由こ、彼女に與へられた重大な責任こを、他に選ばれた乙女達の誰よりも深く重く感じてゐた。彼女は藤色の衣を纏ひ、首からは翡翠の勾玉をかけ垂し、その頭には瑪瑙をつらねた玉鬘をかけて、兩脇には磨かれた鷹の嘴で造られた一對の釧を附けてゐた。さうして、彼女の右手の指に、嵌つてゐる五つの鑲は、亡き母の片身こして、彼女の愛甞し續けて來た黄金の鑲であつた。彼女は牛車から降りるこ、一人の童男に共なはれて宿禰の部屋へ這入つていつた。宿禰は暫く彼女の姿を眺めてゐた。さうして、彼はひこり得意な微笑をもらし乍ら、長羅の部屋の方を指差して彼女に云つた。

「行け。」

香取は命ぜられるまゝに長羅の部屋の杉戸の方へ歩いていつた。彼女の足は戸の前まで

來るこ立ち悚んだ。

「行け。」こ再び後ろで宿禰の聲がした。

彼女は杉戸に手をかけた。しかし、もし彼女が不彌の女に負けたなら、さうして、彼女が、もし奴國の女を穢したときは？

「行け。」こ宿禰の聲がした。

彼女の胸は激しい呼吸のために波立つた。が、それと同時に彼女の唇は決意にひき締つて慄へて來た。彼女は手に力を籠め乍ら靜に杉戸を開いてみた。彼女の長く心に秘めてゐた愛人は、毛皮の上に横はつて眠つてゐた。しかし、彼女の頭に映つてゐた曾ての彼の男々しく美しかつたあの顔は、今は擴まつた窪みの底に眼を沈ませ、髻は突起した額を蔽つて縮まり、さうして、彼の兩頬は餓ゑた鹿のやうに細まつて落ちてゐた。

「王子、王子。」

彼女は跪拜いて小聲で長羅を呼んだ。彼女の聲はその氣高き容色の上に緘らんだ。しかし、長羅は依然として彼女の前で眠つてゐた。彼女は再び膝を長羅の方へ進めて行つた。

「王子よ、王子よ。」

するこ、突然長羅の半身は起き上つた。彼は爛々こ眼を輝かせて、暫く部屋の隅々を眺

めてゐた。さうして、漸く跪拜いてゐる香取の上に眼を注ぐこ、彼の熱情に輝いたその眼は、急に光りを失つて細まり、彼の身體は再び力なく毛皮の上に横たはつて眼を閉ぢた。香取の顔色は蒼然として變つて來た。彼女は身を床の上に俯伏せた。が、再び彈かれたやうに頭を上げるこ、その蒼ざめた頬に涙を流しながら、聲を慄はせて長羅に云つた。

「王子よ、王子よ、我は爾を愛してゐた。王子よ、王子よ、我は爾を愛してゐた。」

彼女は不意に言葉を切るこ、身體を整へて端坐した。さうして、頭から靜かに、玉鬘を取りはずし、首から勾玉をこりはづすこ、長羅の眼を閉ぢた顔を從容こして見詰めてゐた。するこ、彼女の唇の兩端から血がたら／＼こ流れて來た。彼女の蒼だめた顔色は、一層その色が蒼ざめて落つき出した。彼女の身體は端座したまゝ、床の上に傾くこ、最早や再びこは起き上つて來なかつた。かうして、兵部の宿禰の娘は死んだ。彼女は舌を咬み切つて自殺した。しかし、横たはつてゐる長羅の身體は身動きもしなかつた。

香取の死の原因を知らなかつた奴國の宮の人々は、一齊に彼女の行爲を賞讃した。さうして、長羅を戴く奴國の乙女達は、奴國の女の名譽のために、不彌の女から王子の心を奪ひ返せこ叫び始めた。第四の乙女が香取の次ぎに選ばれて再び立つた。人々は齊しく彼女の美しさの効果の上に注目した。するこ、俄然こして彼女は香取のやうに自殺した。何ぞ

なら香取を賞讃した人々の言葉は、あまりに莊嚴であつたから。しかし、また第五の乙女が宿禰のために選ばれた。人々の彼女に注目する仕方は變つて來た。けれども、彼女の運命も第四の乙女のそれと等しく不吉な慣例を造らなければならぬのは當然のこゝであつた。かうして、奴國の宮からは日々に美しい乙女が減りさうになつて來た。娘を持つた奴國の宮の母親達は急に己の娘の美しい装ひをはぎこつて、農衣に着せ變へるこゝ、宿禰の眼から家の奥深くへ隠し始めた。しかし宿禰はひそり、ますます憂慮に墮んだ暗鬱な顔をして、その眼を光らせ乍ら宮の隅々をさ迷うてゐた。第六番目の乙女が選ばれて立つた。人は恐怖を以て彼女の身の上を氣遣つた。その夜、彼らは乙女の自殺の報らせを聞く前に、神庫の前で宿禰が何者かに暗殺されたこと云ふ報導を耳にした。しかし、長羅の横はつた身體は殆ど空虚に等しくなつた王宮の中で、死人のやうに動かなかつた。

或る日、一人の若者が、王宮の門前の櫃かやの根ほこらを見るこゝ、疲れ切つた體をその中へ馳け込ませてひそり叫んだ。

「不彌の女を我は見た。不彌の女を我は見た。」

若者の聲に應じて出て來る者は誰もなかつた。彼は高縁に差し込んだ太陽の光りを浴びて眠つてゐる童男の傍を通り乍ら、王宮の奥深くへだんくく這入つていつた。

「不彌の女を我は見た。不彌の女は邪馬臺にゐる。」

長羅は若者の聲を聞くこゝ、矢の音を聞いた猪のやうに身を起した。彼の顔は赧らんだ。

「這入れ、這入れ。」しかし、彼の聲はかすれてゐた。若者の呼び聲は、長羅の部屋の前を通り越して、八尋殿へ突きあたり、さうして、再び彼の方へ戻つて來た。長羅は蹠蹠きながら杉戸の方へ近寄つた。

「這入れ、這入れ。」

若者は杉戸を開けるこゝ彼を見た。

「王子よ、不彌の女を我は見た。」

「よし、水を與へよ。」

若者は馳けて行き、馳けて歸つた。

「不彌の女は邪馬臺にゐる。」

長羅は盃の水を飲み干した。

「爾は見たか。」

「我は見た、我は邪馬臺の宮へ忍び入つた。」

「不彌の女は何處にゐた。」

「不彌の女を我は見つた。不彌の女は邪馬臺の宮の王妃になつた。」

長羅は激怒に壓伏されたかのやうに、たゞ黙つて慄へながら床の上の劍を指差してゐた。

「王子よ、邪馬臺の王は戦ひの準備をなした。」

「劍を拾へ。」

若者は劍を長羅に與へるに再び云つた。

「王子よ、邪馬臺の王は、奴國の宮を攻めるであらう。」

「邪馬臺を攻めよ。兵を集めよ。我は爾を宿禰にする。」

若者は喜びに眉毛を吊り上げて黙つてゐた。

「不彌の女を奪へ。邪馬臺を攻めよ。兵を集めよ。」

若者は盃を蹴つて部屋の外へ馳け出した。間もなく、法螺が神庫の前で高く鳴つた。それに應じて、銅鑼が宮の方々から鳴り出した。

二十六

邪馬臺の宮では、反繪の狂暴はその度を越えて募つて來た。それにひきかへ、兵士達の間では、卑彌呼を尊崇する熱度が戦ひの準備の整つて行くに従つて高まつて來た。何ぜな

ら、未だ曾て何者も制御し得なかつた反繪の狂暴を、たゞ一睨の視線の下に壓伏さし得た者は、不彌の女であつたから。さうして、彼女のために、反繪の劍の下からその生命を救はれた數多くの者達は彼らであつた。彼らは彼らの出征の結果については必勝を期してゐた。何ぜなら、未だ何者も制御し得なかつた邪馬臺の國の大なる恐怖を、たゞ一睨の下に壓伏さし得る不彌の女を持つものは彼らの軍であつたから。反繪の出した三人の偵察兵は歸つて來た。彼らは、奴國の王子が卑彌呼を奪ひに邪馬臺の宮へ攻め寄せるに云ふ報導を齎した。反繪と等しく怒つた者は邪馬臺の宮の兵達であつた。その翌朝、進軍の命令が彼らの上に下された。一團の先頭には騎馬に跨つた反繪が立つた。その後からは、盾の上で輝いた數百本の鋒尖を従へた卑彌呼が、六人の兵士に擔がれた乗物に乗つて出陣した。彼女、長羅を身邊に引き寄せる手段として、冑の上から人目を奪ふ紅の染衣を纏つてゐた。一團の殿には背に投げ槍と食糧を荷ひつけられた數十疋の野牛の群が連つた。彼らは弓と矢の林に包まれて、燃え立つた櫛の紅葉の森の中を奴國の方へ進んでいつた。さうして、この甍々とした武裝の行列は、三つの山を昇り、四つの谷に降り、野を越え、森をつききつて行つたその日の中に、二人の奴國の偵察兵を捕へて首斬つた。二日目の夕暮れ、彼らはある水の涸れた広い河の岸へ到着した。

不彌を一舉に蹂躪して以來、まだ日のたぬ奴國の宮では、兵士達は最早や戦争の準備をする必要がなかつた。神庫の中の鋒も劍も新らしく光つてゐた。さうして、彼らの弓弦は張られたまゝにまだ一矢の音をも立て、はるなかつた。しかし、王子長羅の肉體は弱つてゐた。彼は焦燥しながら鶴と鶏と山蟹の卵を食べ續けるかたはら、その苛立つ感情の制御しきれぬ時になるこゝ、必要な偵察共を矢繼早やに邪馬臺へ向けた。さうして、彼は兵士達に逢ふ毎に、その輝いた眼を狂人のやうに山の彼方へ向けて、彼らに云つた。

「不彌の女を奪へ。奪つた者を宿禰にする。」

彼の言葉を聞いた兵士達は互にその顔を見合せて黙つてゐた。しかし、それと同時に彼らの野心は、その沈黙の中で互に彼らを敵と見なして睨み合せた。

數日の後、長羅の顔は蒼白く瘦せたまゝ、に輝き出した。さうして、逞ましく前に蹲んだ彼の長軀は、駿馬のやうに兵士達の間を馳け廻つてゐた。出陣の用意は整つた。長羅の正しく突がつた鼻と馬の鼻とは眞直に邪馬臺を睨んで進んでいつた。數千の兵士達は、互に敵にこなつて塊つた大集團を作りながら、聲を潜めて彼の後から従つた。長羅の馬は邪馬

臺へ近か寄るに従つて、次第にひこり兵士達から放れて前へ急いだ。このため兵士達は休息するこゝを忘れねばならなかつた。しかし、彼らはその熱情を異にする長羅の後に續くこゝは不可能なこゝであつた。さうして、二日がたつた。兵士達は、ある河岸へ到着したときは、最早前進するこゝも出来なかつた。彼らはその日、まだ太陽の輝いてゐる中から河原の芒の中で夜營の準備にこりかゝつた。

遠い國境の山の峯が一つ高々煙を吐いてゐた。太陽は桃色に變つて落ち始めた。そのとき、遽に對岸の芒の原がざわめき立つた。さうして、一齊に水禽の群れが列を亂して空高く舞ひ上るこゝ、間もなく、數千の鋒尖が芒の穂の中で輝き出した。

「邪馬臺の兵が押し寄せた。」

「邪馬臺の兵が攻め寄せた。」

奴國の兵士達は動亂した。しかし、彼らは休息を忘れて歩行し續けた疲勞のために、却つて直ちにその動亂を整へて、再び落ちつきを奪回するこゝに容易であつた。彼らは應戰の第一の手段として、鋒や劍やその他總ての武器を芒の中に伏せて鎮まつた。何ぜなら、彼らは奴國の兵の最も特長とする戦法は夜襲であるこゝを知つてゐた。數名の斥候が川上と川下から派出された。長羅は一人高く馬上に跨つて對岸を見詰めてゐた。川には淺瀬が

中央にたゞ一線流れてゐた。さうして、その淺瀬の兩側には廣い砂地が續いてゐた。

夜は次第に降りて來た。對岸の芒の波は、今は隴ろに背後の山の下で煙つて見えた。その時、突然對岸からは銅鑼がなつた、するこ、尾に火をつけられた一團の野牛の群れが、雲のやうに棚曳いた對岸の芒の波を蹴破つて、奴國の陣地へ突進して來た。奴國の兵は野牛の一團が眞近まで迫つたまきに、一齊に彼らの群へ向つて矢を放つた。牛の群は鳴き聲を上げて突き立つこ、逆に邪馬臺の陣地の方へ猛然に押し返した。奴國の兵は牛の後から對岸に向つて押し寄せようこした。しかし、長羅は彼等の前を一直線に馬を走らせてその前進を食ひこめた。こ、齊しく野牛の群は、對岸から放たれ出した矢のために、再び逆流して奴國の方へ向つて來た。それと同時に鯨波とさの聲が對岸から湧き上るこ、野牛の群れの兩翼こなつて、投げ槍の密集團が、砂地を蹴つて兩方から襲つて來た。奴國の兵は直ちに川岸に添つて長く延びた。さうして、その敵の密集團に向つて一齊に矢を放つこ、再び密集團は彼らの陣營へ引き返した。野牛の群は狂ひながらひこり奴國の兵の斷ち切れた中央を突きぬけて、遠く後方の森の中へ馳け過ぎた。

夜は全く降りてゐた。國境の噴火の煙は火の柱こなつて空中に立つてゐた。奴國の兵の夜襲の時は迫つて來た。しかし、彼等の疲勞は一段こ増してゐた。彼らは敵の陣地の鎖ま

るこ一緒に芒の中に腰を下して休息した。長羅は彼らの疲勞の状態に氣がつくこ、その計畫してゐた夜襲を斷念しなければならなかつた。けれども、奴國の軍は次に來るべき肉迫戦のまきまでに、敵の陣營から矢をなくしておかねばならなかつた。それには夜の闇が必要であつた。彼らは疲勞の休まる間もなく、聲を潜めて川原の中央まで進んで出るこ、盾を扉のやうに横につらねて身を隠した。さうして、彼らは一齊に足を踏みた、き、鯨波の聲を張り上げて肉迫する氣勢を敵に知らしめた。對岸からは矢が雨のやうに飛んで來て盾にあたつた。彼らは引きかへすこ又進み、退いては再び喊聲を張り上げた。さうして、時刻を隔いてこの數度の牽制を繰り返してゐる中に、最早對岸からは矢が飛ばなくなつて來た。しかし、彼らに代つて敵からの牽制が激しくなつた。初め奴國の兵は敵の喊聲が肉迫する度に、恐怖のために思はず彼らに向つて矢を放つた。けれども、それが數度續くこ、彼らは敵軍の夜襲も所詮自國の牽制こ等しかつたこに氣附いて矢を惜しんだ。夜はだんだんこ更けていつた。眠つたやうに沈黙し合つた兩軍からは、盛に斥候が派せられた。川上、川下の砂地や芒の中では小さな斥候戦が方々で行はれた。かうして、夜は兩軍の上から明けていつた。朝日は奴國の陣地の後方から昇り初めた。邪馬臺の國の國境から立ち昇る噴火の柱は再び煙の柱に變つて來た。さうして、兩軍の間には、血の染んだ砂の上に、

矢の刺つた屍や牛の死骸が朝日を受けて點々として横たはつてゐた。そのとき、邪馬臺の軍はまばらに一列に横隊を造つて、靜々屍を踏み乍ら進んで來た。彼らの連なつた楯の上からは油を滲ませた茅花の火口ほぐらが鋒尖につきさせられて燃えてゐた。彼等は奴國の陣營眞近く迫つたときに、各々その鋒尖の火口を芒の中へ投げ込んだ。奴國の兵は直ちに足で落ち來る火口を踏みつけた。しかし、彼らの頭の上からは、續いて無數の投げ槍と礫が落ちて來た。それに和して、邪馬臺の軍の喊聲が、地を踏み鳴らす登音と一緒に湧き上つた。消え残つた火口の焰は芒の原に燃え移つた。奴國の陣營は竹の爆ける爆音を交へて濛濛と白い煙を空に巻き上げた。長羅は全軍を森の傍まで退却させた。さうして、兵を三團に分けるこゝ、最も精銳な一團を自分と共に森へ殘し、他の二團をして、立ち昇る白煙に隠れて川上と川下に別れさせた。分れた二團の軍兵は鋒と劍を持つて、砂地の上の邪馬臺の軍を兩方から一時にぎつと挾撃した。白煙の中へ矢を放つてゐた邪馬臺の軍は散亂しながら對岸の陣地の中へ引き返した。奴國の二團は川の中央で一つに合するこゝ、大集團となつて逃げる敵軍の後から追撃した。さうして、今や彼らは敵の陣營へ殺倒しようとしたとき、新たなる邪馬臺の軍が、奴國の密集團を中に挟んで芒の中から現れた。彼らは奴國の密集團と同じく鋒と劍を持つて、喊聲を上げつゝ、堂々二方から押し寄せて來た。長羅は

自國の軍が敵軍に包まれたのを見てこゝろ、残つた一團を引きつれて斜に火の消えた芒の原を突き破つて現れた。邪馬臺の軍は彼の新らしき一軍を見るこゝろ、奴國の密集團を包んだまゝ、急に進行を停止した。長羅は自分の後ろに一團を張つて敵の大團に對峙しながら動かさなかつた。その時、對岸の芒の中から、逃げ込んだ邪馬臺の兵の一團が、再び勢ひを盛り返して進んで來た。こゝろ、三方から包まれた奴國の密集團は渦巻きながら、邪馬臺の軍の右翼となつた大團の中へ殺倒した。それと同時に、かの芒の中から押し返した敵の一團は、投げ槍を霜のやうに輝かせて動亂する奴軍の中へ突入した。忽ち、動搖めく人波の點々が、倒れ、跳ね、躍り、渦巻きそれらの頭上で無數の白い閃光が明滅した。こゝろ、やがて、その殺戮し合ふ人の團塊は叫喚しながら紅となつて、延び、縮み、揺れ合ひつゝ、次第に小さく擦り減つて行くこゝろ、遽に長羅の動かぬ一團の方へ潮のやうに崩れて來た。それに和して、今迄彼と對峙して止まつてゐた邪馬臺の左翼の軍勢も、一時に鯨波の聲を張り上げて彼の方へ押し寄せた。長羅の一團は彼を捨て、崩れて來た。長羅は一人馬上に踏みこまつて、「返せ、返せ。」と叫び續けた。

その時、放してあつた一人の奴國の斥候が彼の傍へ馳け寄つて來るこゝろ、手を喇叭のやうに口にあて、彼に叫んだ。

「不彌の女を我は見た。見よ、不彌の女は赤い衣を纏つてゐる。」

長羅は彼の指差す方を振り向いた。そこには、肉迫して来る刃の潮の後方に、紅の一點が静々赤い帆のやうに彼の方へ進んでゐた。長羅はひらりと馬首を敵軍の方へ振り向けた。馬の腹をひき蹴り蹴つた。こゝ彼は無言のまゝ、その紅の一點を目がけて、押し寄せる敵軍の中へたゞ一騎募進した。鋒の雨が彼の頭上を飛び廻つた。彼は楯を差し出し、片手の劍を振り廻して飛び来る鋒を斬り拂つた。無数の顔こ劍が彼の周圍へ波打ち寄せた。彼の馬は飛び上り、跳ね上つて、その人波の上を起伏しながら前へくゞ突き進んだ。長羅の劍は馬の上で風車のやうに廻轉した。腕が飛び、劍が飛んだ。ばたくゞこ人は倒れた。こゝ、急に人波は彼の前で二つに割れた。

「卑彌呼。」長羅の馬は突進した。そのこゝき、片眼の武將を乗せた黒い一騎が、砂地を蹴つて彼の前へ馳けて來た。

「聞け、我は邪馬臺の王の反繪である。」

長羅の馬は突き立つた。さうして、反繪の馬を横に流すこゝ、圓を描いて擔がれた高座の上の卑彌呼の方へ突進した。

卑彌呼の高座は、彼の馬首を脱し乍ら反繪の後へ廻つていつた。長羅は輝いた眼を卑彌

呼に向けた。

「卑彌呼。」

彼は馬を蹴らうとするこゝ、再び反繪の馬は疾風のやうに馳けて來た。こゝ、長羅は突然馬首を返すこゝ、反繪の馬に向つて突撃した。二頭の馬は嘶きながら突き立つた。楯が空中へ跳ね上つた。再び馬は頭を合せて落ち込んだ。こゝ、反繪の劍は長羅の腹へ突き刺さつた。同時に、長羅の劍は反繪の肩を斬り下げた。長羅の長軀は反繪の上に躍り上つた。二人の身體は逆様に馬の上から墜落するこゝ、抱き合つたまゝ、砂地の上を轉つた。蹴り合ひ、踏み合ふ彼らの足尖から、砂が跳ね上つた。草葉が飛んだ。さうして、反繪の血走つた片眼は、引つ摺まれた頭髮に吊り上げられたまゝ、長羅の額を中心に上になり、下になつた。二つの口は噛み合つた。亂れた彼らの頭髮は絡まつた鳥のやうにばさ／＼と地を打つた。

卑彌呼の高座は二人の方へ近か寄つて來るこゝ降された。しかし、邪馬臺の兵士の中で、彼らの反繪を助けようとするものは誰もなかつた。何ぜなら、邪馬臺の恐怖を失つて、幸福を増し得る者は彼らであつたから。彼らは卑彌呼と一緒に劍を握つたまゝ、血砂にまみれて呻き乍ら轉々する二人の身體を見詰めてゐた。彼らの顔は、一樣に、彼らの美しき不彌の女を守り得る力を、彼女に示さんとする努力のために緊き締つてゐた。しかし、間も

なく彼らの前で、長羅は反繪の塊りは、卑彌呼の二人の良人の仇敵は、戦ひながら次第にその力を弱めていつた。さうして、反繪の片眼は瞑むられたま、砂の中にめり込むと、二人は長く重なつたま、動かなかつた。卑彌呼はひそり彼らの方へ近かついた。そのとき、長羅は反繪の胸を踏みつけて、突然地から湧き出たやうに起き上つた。彼は血の滴る頭髪を振り亂して、柔に微笑しながらその蒼ざめた顔を彼女の方へ振り向けた。

「卑彌呼。」

彼女は立ち停るに劍を上げて身構へた。兵士達は長羅の方へ肉迫した。

「待て。」と彼女は彼らに云つた。

「卑彌呼、我は爾を迎へにこ、へ來た。」

長羅は腹に反繪の劍を突き通したま、兩腕を擴げて彼女の方へ歩まうとした。しかし、彼の身體は左右に二足三足踉跟めくも、滴る血の重みに倒れるかのやうにばつたり地に倒れた。彼は再び起き上つた。

「卑彌呼、爾は我と共に奴國へ歸れ。我は爾を待つてゐた。」

「爾は我の夫の大兄を刺した。」

「我は刺した。」

「爾は我の父と母を刺した。」

「我は刺した。」

「爾は我の國を滅ぼした。」

「我は滅ぼした。」

長羅は再び踉跟めきながら彼女の方へ歩みよつた。と、またも彼の身體はごつごつ倒れた。振り上げた卑彌呼の劍は下がつて來た。長羅は尙も起き上らうとした。しかし、彼の胸は地に刺された人のやうに地を放れるに地についた。さうして、彼は漸く砂の上から額を上げるに彼女の方へ手を延ばした。

「卑彌呼、我は爾を奪はんために、我の國を滅ぼした。我は爾を奪はんために我の父を刺した、宿禰を刺した。爾は返れ。」

長羅の蒼ざめた額は地に垂れた。

「卑彌呼、卑彌呼。」

彼は恰も砂に啞くごごく彼女を呼ぶと、彼の臉は閉ぢられた。卑彌呼の身體は顛へて來た。彼女の劍は地に落ちた。

「大兄よ、大兄よ、我を救せ。彼を刺せと爾は云ふな。」

卑彌呼は頭をか、へるに劍の上へ泣き崩れた。

「大兄よ大兄よ我を赦せ。我は爾のために長羅を撃つた。我は爾のために復讐した。あ、長羅よ長羅よ、我を赦せ。爾は我のために殺された。」

長羅に反繪に卑彌呼を残して、彼方の森の中では、奴國の兵を追ひながら、奴國の方へ押し寄せて行く耶馬臺の軍の鯨波の聲が一段に空に上つた。

欠

欠

大正十三年八月十日
大正十三年八月十日



圖書目錄進呈

文藝春秋叢書(日輪)

定價 金五十五錢

著作者 橫 光 利 一

發行者 和 田 利 彦

東京市日本橋區通四丁目五番地

印刷者 土 屋 清 隆

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所 博文館印刷所

發行所 東京市日本橋區通 春 陽 堂

振替東京一六一七番
電話大手五二一〇番
本局四二一〇番

527
25

2/21/77

2
10 8

終